
死神のお仕事-第三幕-

恢坐志津那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神のお仕事―第三幕―

【Nコード】

N3863G

【作者名】

恢坐志津那

【あらすじ】

天界において、平和など一時的なものに過ぎない。幸せなど…ただの偽善だ。争うこと…戦うことがこの世界の本質だ。そうだ…天界人が平和慣れしないように、二つほどイベントを作っておこう…。一つは天界戦争。レクイエムを合図に始まるバトルロワイヤルだ。そして、もう一つは…だ。これは…いい…。合図など無いシンプルな戦いだ。早速開始しよう…天界全土を巻き込む大掛かりな“消滅試合”を……。これが死神の…最後の仕事だ。」人気シリーズ、死神のお仕事の第三作目！

第二幕までのあらすじ（前書き）

お待たせしました（・ω・）／
死神のお仕事ファン必見、シリーズ三作目をどうぞお楽しみ下さい。

第二幕までのあらすじ

死神の仕事は、寿命尽きた人間を迎えに行くことである。

しかし、広い天界：子供を助ける死神もいた。

「私はアルフレッド・フィアラ。：皆からはアルフと呼ばれている。

」

彼は天界を司る何者かの怒りに触れ、永遠に無の世界をさまよう刑
： “あらゆる意味での死” を受けることになってしまった。

それから三年という月日が経ったある日。

無の世界を訪れた二人の悪魔、ミトウとシスの復活の儀式によって、
アルフは再び命を得る。

「アルフは死神なんですよ？ だったらさー、ちゃんと死神の仕事しようよー。」

「忘れちゃったんだね。私達が教えよっか？」

記憶を無くしていた彼は、恩返しのため…と二人に従い、無意味に人を傷つける残虐な死神へと化してしまったのだった…………。

同じ頃。

下界にある兄弟があった。

車イスに乗った青年フィル・ティディオと、至って普通の少年カナル・ティディオ。

それなりに幸せで平和な日常を過ごしていた二人だったが…

「…私は…死神だからね。」

突然のフィルの告白と死神化。

戸惑い失望するカナルも、いつの間にか“狭間の死神”と化し、かつての兄弟だったアルフと敵対するはめに…………。

そんな中、狭間の死神としてカナルは睡眠時だけ天界に転送されることを知った。

そこで出会った、アルフの仲間だった死神達…。

元気少女のイリア、すぐ熱くなるリアゼ、クールな女性エマ、渋いけれどまだ二十代のシーク…。

彼らと共にカナルは天界と下界を守り、苛烈な戦いを得て、アルフの記憶を取り戻すことができた。

しかし、その平和も長く続かず、

「主様は君と全ての命の取引をお望みさ。」

主こと懺魔と運命を司る死神フィルの謀略によって、メルディは捕らわれ、アルフも危機的状况に陥ってしまった。

二人を助けるために、四人の死神と

「僕はメントノフ・ドルイヤ。メンちゃんって呼んでね！」

アルフの師匠と名乗る者を加え、塔へと向かったのだ。

塔での戦いは、圧倒的に懺魔側が強かったが、絆の力でアルフとカナルが勝利し、再び世界に平和が戻った。

自分が居なくてももう大丈夫と確信したアルフは浄土へ向かい、カナルは下界へと帰っていき、物語はここに終わりを得たかのように思えた。

だが、物語はまだ本当の意味では終わっていなかったのだ……。

平和という名の偽善

彼らに術一すべ一などない。

自ら壊してしまった彼らに…

助かる術などあるわけは無い。

そう…全ては偽善だ。

今の天界は“平和”という名の偽善に満ちている…。

だから、私は決めた。

平和を壊すと。

それには…もう一人の私を消す必要がある。

どこに居るのかはわかっている。

後は消すだけ…。

そろそろいいかもしれない。

さて、行くとしようかな。

もう一人の自分を消滅しに行こう……………。

「一体、どうなっちまってるんだよ、エマ?」

シークは、ほとほとまいったような顔で、無線機ごしのエマに聞く。

彼が居るのは、天界の中央にある広場。

そして、彼の周りには雲にうつ伏した死神達。

斬り傷やかすり傷はあるものの、全員致命傷は負っていない。

『自分に訊かれても…困るんだけど。けれど、彼らの意志以外のものもあるっていうことだけは確かだよ。』

「…んなこたあ、わかってる。そっちも全滅…か?」

『わかってるなら、訊かないでよ。…全滅。正気な死神はゼロ。…
…切るよ。』

「おっ、奇遇だな…俺も切るところだったぜ。」

ピツと音がして、無線機は遮断された。

「さーて…と。新手の登場か。仕方ねえから、相手してやっけどよ
…恨むんじゃないぞ？」

無線機をしまいながら、シークはクルリと反転した。

「倒す…倒す…。」

「消えろ…偽物…。」

凄まじい殺気を放つ者達は、先ほどシークが倒したはずの無数の死神達だった。

同じ頃。

下界のある場所にある高校。

「あー…転校生を紹介しよう。ミトウちゃんとシスくんだ。」

眼鏡をかけた若い先生が言って、

「ミトウです。みんな、よろしくー。」

「シス。一応、言っとく。………よろしく。」

名前を呼ばれた二人の少女は、思い思いの挨拶をした。

「なっ…なっ…。」

それを見た一人の男子高校生が、目を見開き口をパクパクさせる。

「ん？どうした、カナル・ティディオ。知り合いか？」

「なっ…なんでー!？」

教師の質問には答えず、男子高校生は大声で叫んだのだった。

「ん？あっ…カナルじゃん。ま、そういうことだから、よろしく。」

「知ってる人間が居るって心強いねー。こっちでも遊ぼーね、カナ
ル。」

カナルを見つめ、ミトウはニコニコ笑いながら、シスはぶっきらぼ
うに返したのだった。

その日の放課後。

「…なんで、二人とも下界に居るの？それも…人間の女子高生として。」

カナルは、周りの同級生に聞こえないように、小声でミトウとシスに訊いた。

「なーんで、あんたに答えなきゃいけないわけ？別にいいじゃん。」

シスは、ふんと鼻を鳴らしミトウを帰ろうと促す。

しかし、ミトウはそのくらいは答えてもいいんじゃないかなとその場に留まった。

「別に話す義理ないじゃんか、ミトウ。さっさと戻って計画立てようよ。」

「うん…それもそうなんだけどー。えーっとー、主様は倒されちゃったけどー、また何年後にか復活するからー、私達がそれまでにスパイしと思うたのー。」

「…スパイ？」

カナルの問い返しに、スパイだよーとミトウが繰り返す。

「ってことでー、これからよろしく、カナルー。」

「あ…よろしく。」

ぺこりとお辞儀したミトウにつられ、カナルも礼をした。

まだ帰っていない同級生達が、何やってんだあいつらという目で三人を見ている。

「ほら、もう行くよ、ミトウ！」

「うん。またねー、カナルー。」

シスは、笑顔で手を振るミトウを連れて、スタスタと教室を出て行った。

「…………って、なんで普通に見送ってんの、僕!？」

二人が去ってから数秒後、カナルは自分で自分に突っ込みを入れた。

「なに、一人漫才やってんだ、あいつ？」

リーが怪訝そうな顔で、遠巻きに見ていた。

天界外れにある浄土。

「どうかしたの、アルちゃん？」

不意に後ろを振り返ったアルフに、メントノフが声をかける。

「…………誰かの叫びが聞こえたような気がして。」

「叫び？叫びなら、さっきから周りですっと聞こえてるよ？」

メントノフの言葉通り、彼らの周りではウォーとかタアツとかいう声がひっきりなしに聞こえている。

浄土は、修行の場であり、決して少なくは無い人数の天界人が各々鍛えているのだった。

「…下界から聞こえてきたと思いますが。」

「そう？アルちゃん、耳いいんだね！周りがうるさくて、僕には全く聞こえなかったよ。」

修行中の面々が、ちらとメントノフを見た。

「それよりさ…アルちゃん、あっちに戻っちゃうって本当？」

メントノフは悲しげに眉を下げて尋ねた。

「はい。…閻魔からの呼び出しで急遽戻ることになりました。」

「そっかあ…閻魔様の呼び出しじゃ、しょうがないね…。また…帰ってくるの?」

「…わかりません。しかし、あちらにずっと居る気は無いのは確かです。私には…浄土の方が合っているのです。」

「絶対…絶対、戻ってきてね、アルちゃん!」

メントノフが懇願するように言って、

「…それでは、師匠もお元気で。」

浄土の修行者とメントノフの見送りを受けながら、アルフは天界の中央へと飛び立つのだった……。

コルクドウル区一番街。

「なんか…退屈ー！」

ザシュ！ズザツ！

大量のターゲットを大鎌で斬りながら、イリアが言った。

「退屈って…仕事の中に言うなよな。」

ピシッ！シュパッ！！

小鎌で、イリアとは違うターゲットを斬り裂きながら、リアゼが突っ込む。

「うわあああ…！？」

「だ、だれか…！」

人々は傷付いた手足を無理矢理動かし、何とか逃げようともがく。

しかし、二人の死神の鎌からは逃げ切るはず、次々と地面へと倒れていった。

そこでは、民間二グループのケンカが最中であつた。

平和に見える下界でも、たまにこのような争いが起きることがあるのだつた。

「うらあああ！ さっさと退けや！」

「何よ、あんた達こそ退きなさいよ！」

争いのリーダーシップをとっている男女が言い合った。

「もうー！ なーんで、あたしとリアゼが同じ仕事場なのっ！？ なー

んでアルフは居なくなっちゃったのっ!」

「知るかよ!俺だってピンク娘と一緒に仕事なんて…やりたかねえし。」

「アルフと仕事したいー!た・い・くつー!」

「うるせーな…少しは黙ってろっつの、ピンク娘!」

地上の争いに感化されたかのように、イリアとリアゼもケンカを始めてしまったのだった……。

「やはり…平和とは偽善。実にくだらない…。」

それを空高くから見ていた何者かがぼつりと呟いた。

ウォンウォンと犬の鳴く声が、家の中まで響いてきている。

「どうしたのかしら、アル。今日はいつもととは違う鳴き方よ。」

「私…見てくるね。」

十代後半に見える少女が言って、母親らしき女性がお願いねと言葉を返した。

少女は、玄関まで駆けていき、ドアを開け庭に出た。

長年飼っているゴールデンリトリバーが少女に擦りより、嬉しそうにクウンと甘え鳴きした。

「どうしたの…アル？あつ…。」

犬の吠えている対象に目を移し、少女は小さく言葉を漏らした。

それは、全身に黒いフードコートを纏い、背中に黒い翼を携えた……死神。

その死神が携えている大鎌に見覚えがあった。

「もしかして……アルフ？」

少女は問いかけ、死神に近付いていく。

少し経って、自分が話し掛けられたことに気付いた死神は、ゆつくりと振り返った。

フードをとったその死神の髪は緑に近い青色。

しかし……

「アルフ……じゃない。誰……？」

少女が知っている“アルフ”とは違い、瞳は桃色だった。

よく見れば、アルフよりも髪が少し長い。

「…私はセズリカ・ミルハ。…アルフレッド・フィアラを知っているのか？」

セズリカというらしい死神は、抑揚のない声で聞き返した。

「うん…。私は、シャンテ。昔、アルフに助けてもらったの。アル…この犬も、アルフから貰ったの。」

シャンテと名乗る少女は、アルという犬の頭を撫でながら返した。

アルは、犬歯をむき出しにし、ウウツ…とセズリカに向かって威嚇をしている。

「人間を助けているのか…愚かな死神だ。」

「セズリカさんは、アルフの友達…？兄弟…？」

「赤の他人だ。だが…無関係ではない。」

セズリカはそれだけ言うと、フードを被り翼を大きく広げた。

「あっ…待って。どういうこと…」

「人間。関わるな…死にたくないならばな。」

引き止めようとするシャンテに冷たく言い残し、セズリカは空高くへと飛び去っていった。

「なんで…あんなにアルフと似てるんだろう…。それに…」

なんでアルフを探してるんだろうねと、シャンテはアルを見つめながら自問自答するように言ったのだった…。

トントンと、庵の戸を叩く音が千爺の耳に入ってきた。

今時珍しい、檜で作られた純和風の戸だ。

「誰じゃ？戸なら開いておる。入って来るがよい。」

千爺はそう大声で促したが、戸を叩く者は入って来ようとせず、同じ調子で叩き続けている。

「全く…トントントントンうるさいのう。」

お茶飲みタイムを邪魔され、千爺は少々怒り調査で呟き玄関まで歩いていく。

そして、

「新聞ならお断りじゃ。いたずらなら、許さないぞい。」

ぶつぶつ言いながら、戸を開ける。

すると、そこにいたのは…。

「な、何だって！？それは本当か、嬢ちゃん！」

シークは体を仰け反らせ、驚いている様子を表現した。

「あたし、嘘は言わない主義だもんっ！信じたくないけど…本当に本当に…千爺ちゃんがアルフに斬られたのっ！」

イリアは、瞼に浮かべた涙を見られないように、うつむいて言った。

隠しきれない悲しみが、彼女の方を微かに震わせている。

「全く…トントントントンうるさいのう。」

お茶飲みタイムを邪魔され、千爺は少々怒り調査で呟き玄関まで歩いていく。

そして、

「新聞ならお断りじゃ。いたずらなら、許さないぞい。」

ぶつぶつ言いながら、戸を開ける。

すると、そこにいたのは…。

「な、何だって！？それは本当か、嬢ちゃん！」

シークは体を仰け反らせ、驚いている様子を表現した。

「あたし、嘘は言わない主義だもんっ！信じたくないけど…本当に本当に…千爺ちゃんがアルフに斬られたのっ！」

イリアは、瞼に浮かべた涙を見られないように、うつむいて言った。

隠しきれない悲しみが、彼女の肩を微かに震わせている。

「嘘だろ…ピンク娘…。兄貴が千爺さんを…」

「本当だって言ってるでしょ!!…あたしだって、アルフがそんなことするわけないって信じたい。だけど…」

リアゼに言葉を返し、イリアは天界診療所で治療を受けている千爺の言葉を思い出す。

『わしも…信じられんが…っう…あれは…フィアラじゃった…。見間違えるわけは…無い。襲った理由は…な…ぞ…じゃが…っ。』

「襲われた本人が言っているなら、間違いねえんだろうな…。」

シークの考察にエマも同調する。

「そうだね。自分達がいくら庇ったところで、事実は変えられない。セン・フィアラを襲ったのは、アルフレッド・フィアラ…彼に違い

無い…」

「私が…何か？」

不意にエマの言葉を遮る声が後方から聞こえ、その場に居た全員が振り返る。

「アル…フ…？帰ってきたの！？」

声の主は、アルフだった。

自分が疑われていることを理解し、瞳は冷たくシーク達を見つめている。

「……………タイミングが悪かったようだな。私は失礼する。」

「待ちな、アルフ。…どういふことか説明してくれ。」

立ち去ろうとするアルフを、シークが引き止める。

アルフの足がピタリと止まる。

「…説明とは？」

「だから…違うなら違う。本当なら、理由を答えてくれってことだ。」

「ふっ…。」

アルフはシーク達に背中を向けたまま、微かに鼻で笑った。

「兄貴…まさか…？」

「私は…随分、信用が無いのだな。」

「あ、いや…兄貴…俺は信じたいんっすけど…千爺が…。」

罰が悪そうに顔を下げるリアゼ。

「…もういい。ここに来るまでも、何人…何十人という天界人に疑いの目を向けられてきた。私はたった今、天界に入って来たというのに…だ。」

「アルフ…。」

「信じないなら、信じなければいいだけだ。私が千爺を斬る理由など…無いがな。」

「アルフ、待って！」

追いかけてくるイリアの手を振り払い、アルフは下界へと飛び去っていった。

「…鎌かけが徒になったみたいだね、シーク。」

皮肉調でエマは言って、アルフを追いかけるように下界へと飛んで行った。

「…兄貴が言うなら、嘘じゃないと思うっす。俺達…ひどいことを…」

「アルフ…。あたし達…謝らなきゃね…。」

うなだれるイリアとリアゼをよそに、シークは一人ぼんやりと遠くを見つめていた。

事件から二日後、天界広場。

「あ…兄貴…？」

自分より先にくつろいでいた死神に、リアゼは声をかけた。

「…………。」

アルフと思われる背格好の死神は、言葉を返すことも振り向くこともしない。

ただ、上をじっと眺めているだけだった。

フードのせいで、表情は窺えない。

「兄貴…少しでも疑った俺達と話したくないなら、せめて聞くだけ聞いてほしいっす。この前は…すみませんでした!」

リアゼは心から反省しているようで、目の前に居る死神に深々と頭を下げた。

「兄貴が千爺を襲うわけがないのに…俺達…。」

「…………。」

「謝っても謝りきれないっすけど…本当にすまなかったっす。」

「……………悪いが、私は君の謝りたい相手…“兄貴”ではない。」

死神はそこで初めて振り返った。

フードをとった死神の髪は、緑に近い青色。

そして…瞳は澄んだ桃色。

「へっ？じゃあ…あんた、誰だよ？なんで…兄貴に似てるんだよ…？まさか、千爺を襲ったのは…」

「まさかも何も…セン・フィアラを襲ったのは私…セズリカ・ミルハだ。」

セズリカは、少し顔を上げて威圧的な姿勢をとったまま、リアゼに歩み寄っていく。

「なっ…自分がどれだけのことをやったかわかってんのかよ、おま

え！」

「“おまえ”じゃなくて、“セズリカ”だと言っている。」

「名前なんかどうでもいい！なんで…千爺を…。」

今にも噛みつきそうな勢いで歯を食いしばるリアゼに、セズリカはただ冷たい視線を向けている。

「…出来損ないだからだ。懺魔が消えた今、出来損ないのコピーを消したところで問題にはならない。」

「コピー…？出来損ない…？なんだよ、それ…。」

「知らないのか？消滅試合が各地で起きていることを。リアゼク・ギルド…君自身は特別なコピーであることを。オリジナルが消え、他にコピーが居ない今、君はオリジナルの資格を得ているのだよ。」

「特別なコピー…？オリジナルの資格…？」

リアゼは全く意味がわからないと、髪をくしゃくしゃと掻いた。

「知りたいなら教えよう。だが、一つ条件がある。」

「条件…？」

「簡単なことだ。私の…いや、私達と組まないか？テアッド・ホルムスクのコピー…リアゼクよ。」

そう誘いかけて、セズリカは不敵な笑みを浮かべるのだった。

それは真っ直ぐな糸に複雑に絡み、やがて侵略していく…

誰が絡ませ…

誰が解くのか…？

— T o b e c o n t i n u e d … —

混沌の糸

.....。

.....。

.....。

「.....あれっ？ここは...天界？」

カナル・ティディオは辺りを見回しながら、誰にともなく呟いた。

見渡す限り、真っ白な無風の空間。

久々に来たそこは、妙に懐かしい気持ちを思い起こさせた。

「カナル…か？」

前方からフードを脱いだ死神が歩いてくる。

緑に近い青髪、オレンジ色の瞳…。

アルフレッド・フィアラ、その人だった。

「あ…兄さん！久しぶりだね。」

カナルは、にこりと微笑んでアルフに駆け寄る。

「一年ぶりだな。受験生で忙しかったのだろう？」

「うん…それもあるんだけど…。」

「それ以外に來れない理由があったのか？」

「うん…。実は…僕…」

カナルが、頬をかきながらぼつりと話し始めた時。

「アルフーっ！カナルーっ！」

上空からイリアの呼び声が聞こえてきた。

「あ…イリア、久しぶり。今、兄さんと話してて…」

「久しぶりの再会を祝っている場合じゃないのっ！大変なのっ！二人とも…すぐ来てっ！」

イリアは雲の地面に降り立つと、早口に言った。

「イリア…落ち着いて話せ。何があった…？」

「リアゼの奴がいなくなっちゃって…って、それはどうでもいいの
つ。とにかく、みんなが居るところに行かなきゃ！」

「リアゼがいなくなった…？みんな…？」

「うー…話してる暇ないのっ！」

カナルとアルフは不思議そうに顔を見合わせた。

それから、慌てるイリアを先導に、三人は北の方へ飛び立ったのだ
った。

天界中央公園。

「話って何だ、リアゼ？それも…アルフや嬢ちゃんには知らせられねえようなことなんだろう。」

噴水に軽くもたれかかり、けだるそうに欠伸をしながらシークが尋ねた。

「忙しいのに、呼び出してすまないっす。けど、どうしても話したいことがあって…」

答えたのはリアゼ。

シークの正面に立ち、困ったような笑みを浮かべている。

「前置きはいい。さっさと話しちゃいな。」

「はいっす…。シーク…あんたはわかってたんすね、こうなることが。」

リアゼの顔から笑みが消え、厳しい目つきに変わった。

「…………お前にしちゃあ、不躰な質問だな。こうなることって…どうなることだ？」

「しらばっくれても無駄っすよ。あんたの同志…セズリカから聞いたんすから。消滅試合のことも、あんたがオリジナルだってことも…何もかも全部。」

「…アルフと違って、口軽いな、あいつは。」

シークは苦笑しながら、リアゼの方に歩み寄る。

「セズリカに話を聞いたつつうことは、リアゼ…お前もオリジナルなのか？」

「元々はコピーだったけど、今じゃオリジナルっすよ。…あんたはどっちに荷担するんすか？」

「…………その質問、まるごと返すぜ。」

「俺は…オリジナルとして戦うつもりっすけど。あんたの答えが訊きたいんすよ…。」

シークは、さあどうすっかなと呟いただけで、質問には答えなかったのだった。

天界の一端で灼熱の世界、地獄。

「ふむ、ご苦労じゃったな、ザルメス。」

閻魔は、自慢の髭を右手で撫でながら言った。

彼の前に立ったイリアは、どーいたしましてっと笑顔で返す。

「閻魔…様。あの件で再び呼んだのか？」

つい一分前に到着したばかりのアルフが尋ねる。

同じく先ほど来たばかりのカナルは、落ち着かないようにキョロキョロと辺りを見回している。

それもそのはずで、辺りには共同で働かないはずの四種族が集まっていたからだった。

死神…神…悪魔…天使…。

総数は五十人ほどか。

「そうじゃ。わしの予想以上に事態は深刻になってきていてじゃない。最高神力者が倒れた今、収拾が難航しているのだ。」

「アルフ…あの時、疑ったことは謝るよ。許してくれないかもしれないけど…協力してほしいんだよ。」

閻魔に付け加えるように、エマが頼んだ。

「本当は他の種族となんか組みたくないんだけどねえ…仕方なく力を貸してやるぜ。」

「…ハツシェ（注…『レクイエム』参照）。」

「わかってるって。要らぬ口は慎め、だろ。」

上から目線で暴言を吐く神を、先輩の神がたしなめる。

「ハツシェ…だと？」

「よお、ファイアラ。天界戦争以来だな。」

「……………」

アルフは、ハッシェと呼ばれたその神をキッと睨みつけた。

「おー、怖い怖い。そんなに睨むなって。」

「……………」

「今は非常事態なんだぜ？ 私怨は忘れて協力し合わねえと。」

アルフは睨み続けていたが、ハッシェはニヤニヤと笑い返しているだけである。

「フィアラ：ハッシェ・トリミンと因縁があるのはわかっておるが、今だけは忘れるがよい。他の種族も状況を理解し、協力：」

「…気が乗りませんね、粗雑な神と組むのは。」

閻魔の言葉を遮ったのは、怪訝そうに眉を潜めている青年悪魔だっ

た。

灰色でサラサラした髪には、牛のような角が二本が生えている。瞳は赤色。

背中下部には長く細い尻尾、中部には小さな黒い翼。

「ラトラ・アイヌダっけか、あんた？ 悪魔風情がそんな口聞いていると思ってんのかよ？」

「悪魔風情とは、失礼ですね！ …これだから神は嫌いなんですよ。」

ラトラと呼ばれた悪魔は、腕組みをしてふんと顔を背けた。

「どーでもいいんだけど、早く作戦立てようよ。私、忙しいんだけど。」

「そうせつつくな、ナレミ・ビバルディ。物事には順序というものがあるのじゃ。」

ナレミというらしい女性天使は、耳にタコと言葉を流した。

茶色いウェーブ髪に、黄緑色の瞳。

やる気が無いのか、ふわあと大きな欠伸をしている。

「作戦…？」

「共同作戦じゃ、ファイア。四人一組で戦う。」

「あの…そもそも、何と戦うの？ 僕が来れなかった間に、天界で何
が起きているの…？」

怪訝顔のカナルに、それはねとエマが答える。

「オリジナルとコピーの消滅試合が始まっているんだよ。」

「消滅試合…？」

「ここに集まっている者達がコピーで、自分達が戦う相手がオリジナル。」

「うーん…？」

さっぱりわからないよとカナルは首を傾げる。

「難しいかな。じゃあ…趣向を変えよう。カナルは“自分とそっくりな者が世の中に三人は居る”っていう話を知ってる？」

「うん、それなら知ってるよ。」

「つまりじゃな…」

「それはなんですかというと、元々“オリジナル”と呼ばれる生命体が居て、その被験体から“コピー”が三人生まれるからなんだって。」

閻魔は間に入って説明しようとしたが、すぐエマの声に消され失敗に終わった。

「えっ…じゃあ、僕達が戦おうとしている相手って…僕達の元に当たってるってこと？」

「そういうこと。自分達はオリジナルさえあれば、いくらでも作ることができる。オリジナルはたった一人。それにも関わらず、オリジナルよりもコピーの方が優秀に作られ、有名になってしまうことがあるのさ。そうなった時、オリジナルは…」

「自身の存在の意味を失い、コピーに嫉妬する。それが溜まり、統括者が消えた時に爆発する現象が消滅試合というわけか。」

アルフが簡潔にまとめた。

そして、

「あの時、フィル・ティディオは“主を倒してはいけない”と言いたかったのか…。」

誰にも聞こえないような小声でぽつりと呟いた。

「あー…おっほん！子細はプルリエとティディオとフィアラの申し

た通りじゃ。では、組分けをする。」

閻魔はそう言って、何も無い空間から大量の箸が入った箸立てを取り出す。

「箸？わんこそば大会でもやるんですかつ、閻魔様？」

「…くじをやるんじゃよ、ザルメス。ほれ、縁日などでやっておるじゃろ？同じ番号の付いたくじを引いたら、商品がもらえるというやつを。この箸には、先端に番号を振っておる。同じ番号を引いた者同士で組むのじゃ。」

閻魔は呆れたような口調で言って、箸入れを高く掲げる。

「順番などは無い。取りたい者から早い者勝ちで…おおっ!？」

彼の言葉が言い終わらない内に、その場に居た全員が箸入れに殺到した。

あまりの押し合いに、閻魔はボンツと中から弾き飛ばされる。

「イーリアちゃん、五ばーん！！相手は誰っ？」

閻魔の隣に居たイーリアは、一番先にくじを引いて全員に向かって訊いた。

僕ですねと手を挙げたのは、ラトラ・アイヌダだった。

「粗雑な神ではなくて、幸いでした。死神のイーリア・ザルメス：ですよね、よろしくお願いしま：」

「えー！？なんで、アルフでじゃなくてあーんたみたいな弱そうな奴なのよっ！イーリア、すごく不服ー！！」

ラトラの挨拶は、イーリアの絶叫にかき消されてしまった。

「俺は…っと。十一番だ。相手は誰だ？」

「……………私だ。」

ハッシエ・トリミンの問いかけに答えたのは、アルフだった。

ハッシエは、これは傑作だぜと大笑いしてみせた。

「何の因果なんだろうな、この結果は。」

「……………」

「ま、コンビになっちまったもんは仕方無いからな。一つよろしく頼むぜ！」

手を差し出すという友好的な態度を見せる彼とは反対に、アルフは敵対するような冷たい眼差しを向けていた。

「自分は五十番。相手は？」

不穏な空気を察し、エマがわざと大声で言った。

だが、

「……………」

その場に居る者達は、誰一人として手を挙げない。

「……………二人一組じゃなかったっけ？どうなっているのさ、閻魔様。」

「ふむ…どうやら遅れているようじゃ。もうすぐ来るはずなのだが…」

閻魔が長い髭を撫でながら言った時、北の方からタタツと走ってくる影が見えた。

「おお！ギリギリで間に合ったようじゃな。」

「あの人が、自分の相棒…？」

エマは走り来る影に、よく目を凝らしてみる。

そして、

「えっ!？」

と、彼女にしては珍しい驚きの表情を見せた。

「あっ…あれってもしかして…」

「ルティーナ…プルリエ（注…『レクイエム参照』）!？」

「レクイエムの予言者…。本物なのか…!？」

続いて、天界人の数人がざわつき始める。

「えーっ!?! ルティーナさんも、参加するのっ?」

「ルティーナ・プルリエ…って、誰？」

「あっ：そっか、カナルは知らないんだよねっ。数年前のレクイエムで、力を貸してもらった天界の予言者。天界人だけど、下界で暮らしているのっ。」

首を傾げているカナルに、イリアが説明する。

そうこうしている内に、ルティーナ・プルリエは皆の前に姿を見せた。

バレッタでまとめた長い黒髪と、整った顔立ちは変わらない。

レクイエムの時とつだけ違うことは、口をキュッと結び、紫色の瞳は固い決意に満ちていることだった。

「エマ・プルリエ：そなたの相棒は彼女じゃ。緊急事態ということの下界から呼び戻した。」

「よろしくね、エマ。」

ルティーナは、エマの前に立つとにこりと笑いエマの両手を握った。

エマは目をぱちくりさせながらも、よろしく…と返した。

「えっと…僕もまだ組む人を聞いてないんだけど…。」

カナルが遠慮がちに手を挙げながら言った。

「カナル・ティディオか。何番じゃ？」

「七十九番です。」

「あー…私も七十九番だけど。」

閻魔とカナルの間に割って入って答えたのは、ナレミだった。

「あ…よろしくお願いします、ナレミさん。」

「うん。てきとーに頑張るところねー。」

変わった人だなと思いながら、カナルはナレミの隣まで歩いて行った。

その後も、順調にコンビは決まっていく。

閻魔は、頃合いはよしと集まった者達の注目を促した。

「この戦いは、各々の存在を懸けた試合じゃ。そのことを肝に銘じ、尽力するがよい。：では、行ってまいれ、コピーの天界者達よ！」

その声に反応し、集まっていた天界人全てがバツと一斉に飛び立ったのだった…。

下界、とある街路。

「ミトウ、シス…元気だったかい？」

散歩中の人間形態のミトウとシスに、一人の死神が声をかけた。

シスはそちらに視線を向け、あっと声を上げる。

「フィル様！お久しぶり！」

「フィル様ー。どうかしたんですかー？」

二人の言葉通り、死神は消滅したはずのフィル・ティディオだった。

フィルは名前を呼ばれると、わずかに口元をほころばせた。

「主様が復活するまでの空白の時間に…少し手伝ってほしいことがあってね。」

「手伝ってほしいこと、ですか？」

「そう…簡単な手伝いをね。」

天界北西部。

ザシュという鋭い斬音が数度響いた。

「が…はっ…。」

「我ら…オリジナルが……偽物に…やられ………な…ん……て…。」

低い呻き声を残し、二人の天使は砂状になって消えた。

それを冷たい瞳で見下ろしていたのは、二人の死神。

「なかなか気が合うんじゃないか、俺達。」

「…合ってほしくはないがな。」

ハッシエとアルフだった。

「へっ…生贄の儀式のことを、まだ根に持ってたんだろ？」

「…それだけではない。人を小馬鹿にするような奴は、元々好きにはなれないただ。」

「へえ…？ だったら、ここで決着つけとくか？」

ハッシエは、スツと大鎌を胸の前に構える。

アルフは、やめておこうと軽く首を横に振った。

「私とあんたはコンビだ。争うのは得策ではない…。」

「へっ…俺のことを嫌ってる割にはそのくらいの理性はあるんだな、フィアラ。」

「…ただならぬ気配を感じるからな。嫌いだという感情を、理性で抑えつけてしまえるというものだ。」

そう言うと、アルフは胸の前に大鎌を構える。

「そいつには、俺も同感だぜ。隠れる場所なんか無えから、さっさと出て来な。」

「…………。」

ハッシェの声に応じ現れたのは、一人の死神だった。

右に流れるようにセツトされた黄色い髪、憂いの込められた黒い瞳……。

「リアゼ……！」

アルフは思わず、その死神の名を呼んだ。

ハッシェが、知り合いかと尋ねる。

「…………共に戦い、絆を深めてきた仲間だ。罪深い私を“兄貴”と呼んでくれている。」

「すまないっす…兄貴。」

リアゼは本当に申し訳無さそうにうなだれていた。

しかしすぐに、キッと顔を上げ険しい顔つきで小鎌を数本構える。

「リアゼ…私達と戦うというのか？」

「……………」

「お前は…オリジナル側、か。絆よりも地位を選んだのだな…。」

アルフは悲しげに眉を下げた。

「地位とかオリジナルとか、どうでもいいじゃねえか。敵はあいつ
一体だけ…好機ってやつだろ？」

「ハッシェ…何を…？」

決まってるだろうかと、ハッシェは不敵な笑みで返す。

「敵は…遠慮無く消してやんだよ！…はあっ！！」

一番に動いたのは、ハッシェ。

リアゼの真前へスッと移動すると、面食らっている彼に向かって杖を振り上げる。

「止めろ、ハッシエ…！」

「止めねえよ！…毒膜！」

杖からはシャボン玉のような膜が出現する。

そしてそれは、

「うわっ！」

リアゼの体をスッポリと包んでしまう。

ハッシエはその様子を確認すると、サッと離れた。

「毒膜：名前通り、その膜に包まれた奴は毒に犯されていく。たっぷり苦しんで消えな！」

「リアゼ！：ハッシエ、やりすぎではないか？」

「へっ！やるかやられるかって時に、手加減なんかできっか…」

彼の言葉が終わらない内に

「木の葉乱舞！！」

威勢の良い声がして、リアゼを包む膜がパンと割れた。

ヒューと口笛を吹くハッシエ。

「フィアラ：お前の仲間つつうだけあって、やるじゃねえか。あ、元仲間だったっけな？」

アルフは返事を返さず、きつくハッシエを睨んだ。

「やる気か、フィアラ？ たった今、俺とは戦わねえって宣言したばかりじゃ…おっ!？」

「兄貴を愚弄するな!!」

「ちっ…。」

ハッシエの笑みを消させたのは、リアゼの小鎌だった。

リアゼが放った三本小鎌は、ハッシエの服をわずかに斬って彼の手元に戻る。

「リアゼ…。」

「ふん…二人で俺を倒そうって魂胆かよ？ すっかり騙されちゃったぜ、フィアラ!」

ハッシエは杖を高々と上げ、

「麻痺撃！」

と叫んだ。

白い雷光がリアゼを直撃かと思われたが…。

ガンッ！！

「……………っ！？」

「兄貴！」

そうではなかった。

リアゼに向かって放たれたはずの雷光は、彼の体をかすりもせず、ぐるりと周りを回る。

そして、本当の狙いであったアルフへと直撃したのだ。

不意打ちをくらった彼は、ドッと雲の地面に倒れ、うつ…と苦しげな声を上げた。

リアゼはアルフに駆け寄らんばかりに翼を広げたが、自分の立場を思い出しその場に留まった。

「そっちがそのつもりなら、こっちも好きにさせてもらうってものだ。リアゼとかいうオリジナル！お前も当然手伝うよな？」

ハッシエは悪意に満ちた笑みを浮かべ、杖をリアゼに向けた。

「お前…！！よくも兄貴を…！」

「おおっと…あんまり粋がんなよ、リアゼ。俺はただ、手を貸してやっただけだぜ？お前ら、オリジナルの望みなんだろ。」

「なっ…。」

「否定はしねえんだな…。面白い展開だが、俺はいち抜ける。ファイアラを消すなら今の内だぜ？どうするか…お前次第だけだな！」

悔しげに拳を握りしめるリアゼに向かってハッシェは言い放ち、高笑いしながらスッと姿を消した。

後には、リアゼと麻痺状態で無防備なアルフが残る。

リアゼは、兄貴…と呼びかけながらアルフに近付く。

「……っ…リアゼ…。」

「…………。」

雲がポヨッポヨッと何度も揺れる。

視界がややかすんでいたアルフにも、彼がどんどん近付いてきていることがわかった。

「くっ…………。」

「兄貴…ごめん…。」

リアゼは伏しているアルフに向かってぽつりと言った。

「俺のこと…恨んでいいすから。さよなら…兄貴。」

それから、小鎌を一本取り出し、アルフの背中目掛けて思い切り振り下ろしたのだった…。

天界南部。

「そんな…。嘘でしょ…？」

イリアは両手の大鎌を落とさないばかりの衝撃を受けているようだった。

琥珀色の瞳は大きく見開かれ、口は半開きである。

「嘘なんかじゃ無えさ、嬢ちゃん。俺あ…おまえさん達の敵だ。」

イリアの問いかけに答えたのは、一人の死神。

燃え盛る炎のように赤い髪…黄色い瞳…見た目の割に年老いた口調…。

純粹な死神、シック・ルスタリィだった。

「知り合いですか…？」

ラトラが訝しげに目を細める。

「……………うん。」

「ああ、嬢ちゃんと俺あ、確かに知り合い…いや、仲間だった。だが、戦場じゃ敵は味方になるし、味方は敵にもなる。」

「シーク…。」

「なごなごしてる暇は無えんだ、嬢ちゃん。そっちが来ねえなら…こっちから行かせてもらうぜ?」

シークは宣言すると同時に、ラトラの目前に移動する。

「なっ…!?!?」

「嬢ちゃんも消すが、おまえさんが先だ。」

シークはラトラを薙ぎ払うように横に大鎌を振る。

「くっ…甘く見ないで下さいよ！」

ラトラは、とっさに後ろに身を引く。

対象を斬り損ねた大鎌は、ヒュッと空を斬った。

「次はこっちの番です。…はあっ!!」

今度は、ラトラが三叉槍（先端が三つに分かれた刃を持つ槍）でシュークを突く。

「うおっと!!…やるな、あんたも。」

シュークは大鎌の柄で、攻撃を防いだ。

ガチツと擦れたような音が響く。

「シューク…ラトラ…。あたし…どっちの味方をすればいいのっ?」

イリアは、雲の地面の上で双槍を構えオロオロしていた。

シークはかつての仲間、ラトラは今の相棒…。

どちらを選んでも、どちらかが傷つくことはわかっている。

彼女が考えている間にも、シークとラトラは火花を散らしながら攻防戦を繰り返していた。

「たかが悪魔と思っていたが…なかなかやるな、おまえさん。」

シークは体勢を整えるために、一度ラトラから離れた。

「…そのセリフ、そっくりそのまま返させてもらいますよ。」

ラトラはチャンスとばかりに、一気に間合いを詰める。

「これで終わり…っ!？」

槍を大きく振り上げたラトラは、苦しげに後ろによろめいた。

「ラトラ…!？あんた…その傷…」

「…っう…。」

ラトラの肩には、いつの間にか無数の斬り傷が付けられていた。

いずれも致命傷には満たないが、かなりの深手を負っている。

「悪いな…とある奴から俺あペテン師って呼ばれてんだ。“後斬り”の力のせいだな。」

「…っ…ペテン師…?」

「恨みは無えんだが…消えてもらうぜ、ラトラ・アイヌダ!」

ザシュと、シークは何の躊躇もなくラトラの方から腹部を斬る。

「ラトラ！」

「僕の…っ…完敗…です…ね…。」

イリアは彼を助けようと飛び出していたが、わずかに間に合わなかったのだ。

見る見る内に、ラトラの体は細かい粒子となり消えていったのだ…。

「ラトラ…。」

「次は嬢ちゃん、おまえさんの番だ。」

両手に鎌を構えたままうつむくイリアに、シークは大鎌の矛先を向けていたのだった。

天界、場所不明。

「えっと…言いくいんだけど…。」

鼻歌を歌いながら前を飛ぶナレミに、カナルが声を掛ける。

「んー？」

「僕達…一体どこにいるんだろう…？」

「さあ、知らない。」

訊かれたナレミは、どーでもいいんじゃないと投げやりな言葉を返した。

彼らが居る場所は、俗に無の世界の入り口と呼ばれる場所。

灰色の霧が立ち込め、大きな黒い渦があった。

「なんか…来ちゃいけない場所のような気がするんだけど。」

ナレミはクルッと半回転し、カナルの方を向いた。

「男の子ならー、細かいことは気にしない、気にしなーい。せっかくだからー、観光しよっ。」

「観光…。あの…ナレミさん？僕達、閻魔様にオリジナルに対抗するよう言われたの忘れてない？」

「……………忘れてたかもー。」

呑気な調子のナレミと反対に、カナルはハアと深いため息をついた。

（そもそも：ナレミさん、なんでこの戦いに参加したんだろう？こんなにやる気無いのに…。）

「何か理由が…？」

「んー？何？」

カナルの方を振り返って、ナレミが不思議そうに首を傾げる。

「へっ…？」

「へっ…じゃないよ。そっちが質問したんでしょー。…何の理由を訊きたいって？」

「えっ…あ、ごめんなさい。な、何でもないです。」

どきまぎしながら、言葉を返すカナル。

ナレミは変なのーと呟き、また歩き始めた。

「彼女の戦いの理由…それは、私だ。」

「えっ!？」

不意に質問に答える声が背後から聞こえた。

振り返ろうとしたカナルだが、

「うわっ!？」

声の主にガツシリと彼の体を羽交い締めされ、身動きができなくなった。

「セズリカ・ミルハ…。」

ナレミは声の主をジッと見つめ、何の感情も込めずに言った。
カナルが捕らわれたというのに、特に慌てている様子は無い。

「ナレミ・ビバルディ…久しいな。」

セズリカと呼ばれたのは、真っ黒のフードコートを羽織った死神。

ピンク色の瞳は、捕らえているカナルではなく、真っ直ぐナレミを見返していた。

右手に持った大鎌の刃は、カナルの喉元に当てられている。

「兄…さん…？」

カナルは恐々とセズリカを見上げた。

「…悪いが、私は女だ。君が言っているのは、アルフレッド・フィアラのことだろ？」

「えっ…」

「私は彼の…っ…!？」

セズリカは口を閉じ、サッと左へ動いた。

「うわっ!?!」

捕まっているカナルの体も、左へと引っ張られる。

「ちっ…避けられちゃったか…。油断しているからチャンスと思っただのに!。」

「ナ、ナレミさん! 僕まで危ないんだけど!!!」

前方を見たカナルの目には、左手に硝煙を上げる銃を構えたナレミの姿が映った。

まるでカナルの姿は見えていないように、セズリカだけを見据えている。

その口元には、悪意と憎しみに満ちた不気味な笑顔があった。

「…この少年まで殺す気か？君の獲物は私だけだと思ったが。」

「さあねー。私は、セズリカ…あなたを消せば十分だから。他のことは…どーでもいいんだよ。」

「どうでもよくないよ!!」

カナルは、顔面蒼白になってジタバタと暴れ出す。

「…暴れるな。死にたくなければな。」

「じっとしてても、死んじゃうってば!」

セズリカは宥めているつもりだったが、却って興奮させてしまったようだった。

カナルは、ますます激しく暴れる。

「カナルの言うとおり。二人とも、消えちゃうんだよ？大人しくしてても抵抗しても。」

ナレミは間延びした声で言うと、銃の狙いをセズリカの顔面に定める。

「ナレミさん！二人ともって…僕は敵じゃな…」

「運が悪いと思って諦めてねー、カナル。」

「「助けて…兄さん！！」」

カナルが叫ぶ中、ナレミはキュッと引き金を引いた。

パン！パン！パン！

三発の銃声が響き渡り…やがて、その場の物音が全て消えた。

天界中央部、広場近く。

「姉さん…。」

雲のイスに座って、ぼんやりと遠くを見つめるルティーナの肩を、エマがポンツと叩いた。

「…………。」

『何もかもわかってて…それでもこの戦いに参加したんだよね?』

エマはポケットサイズのメモ帳に言葉を書き、ルティーナに見せる。

「…もちろん、そう。」

『姉さんはそれでいいの?』

「…わからない。だけど、これは私がけじめをつけること。ここで待っていれば…きっと明らかになる。何もかもが…。」

ルティーナは弱々しく微笑んでみせた。

「もうすぐ…現れるわ、エマ。混沌の糸を絡ませている者が…。」

襠にある天界相談所、最上階。

アルコールランプだけが灯りとして存在する薄暗い部屋には、二人の人物が居た。

「ご満足ですか？」

大鎌を床に突き立てた青年死神が言った。

「…いいや、まだだ。」

答えたのは、立派な装飾がされた木のイスに座る人物。

質問をした青年ではなく、ランプの灯りをじっと見つめている。

「そう、ですか…。よほど壮大な夢を抱いているとお見受けしましたよ。」

「壮大な夢…？そんな物は持っていない。ただのエゴだ…。人間も死神も同じようにエゴという醜い欲を持っている…それだけさ。」

「エゴですか…。」

「そう…ルティーナを…彼女を葬り去りたいというエゴさ。」

そう説明すると、青年の前に座る者はフードを被せた顔を上げニヤリと笑ったのだった……………。

—To be continued—

巡る幻想

僕は、メントノフ・ドルイヤ。

アルフレッド・フィアラ：“アルちゃん”の師匠だ。

何年経とうと…この世界が滅ぼうと…僕自身が消えてしまおうと…
その事実だけは誰にも消すことはできない。

今、僕は浄土の仕事をほっぽりだして、天界の“ある場所”に来て
いる。

アルちゃん…それから、彼の仲間達のことを心配だからだ。

雲の地面をしつかりと踏みしめ歩き続けている僕は、昔のことを考えていた。

アルちゃんと過ごした大事な日々を……………。

五十年前、天界の外れにある浄土。

「ふう…退屈だなあ。」

メントノフ・ドルイやは、雲のソファに寝そべりぼつりと呟いた。

白いはちまきを巻かれた短い青髪が、重力で下にさらっと流れる。
白い雲の地面を移す大きな瞳は、澄んだ灰色だった。

少年のような若い顔立ちと、十歳になるかならない子供と同じぐらいの低さというのが、彼…いや、彼女の悩みである。

本来、浄土という場所は天界人の修行の場であり、退屈する暇は毛頭無い。

だが、

「ドルイヤ師匠！。自分はもう修行は十分なので明日にはここを出ますー。」

「んー…わかったよ。バイバイ、レイちゃん。元気でねー！」

という会話からもわかるように、彼女は修行者ではなく、むしろ監督する存在だったのだ。

「レイちゃんも去っちゃうのかあ…。だけど…やっぱり寂しいって感じないなあ…。僕…おかしいのかな…？はあ…。」

誰にともなく愚痴を言って、大きなため息をつくメントノフ。

と、そこへ。

「…あんたがメントノフ・ドルイヤか？」
「ん…？」

一人の青年がやって来た。

緑に近い青髪と澄んだオレンジ色の瞳。

黒いフードコートを羽織り、肩に大鎌をかけている。

一般的に、“死神”と呼ばれる者の出で立ちだ。

メントノフは、けだるそうに体を起こし、ちょこんとソファに腰掛ける。

「確かに僕がメントノフ・ドルイヤ…通称メンちゃんだけど…。君は修行の希望者？」

「…私はアルフレッド・フィアラ。知り合いからは、“アルフ”と呼ばれている。閻魔の勧めにより、ここへ来た。」

「あー！君が、あの…アルちゃんなんだ！」

アルちゃん…と言葉を繰り返し、アルフというらしい死神は不服そうに眉を潜めた。

メントノフは、アルフの発言を遮り、有無は言わさないとばかりににっこり笑って言ったのだった。

「アルちゃん…すごく真面目なんだね。」

アルフが修行を始めて一週間が経った頃。

メントノフは、そんな素朴な疑問をアルフにぶつけてみた。

「“修行”だからな…当然のことだ。」

アルフは、数十体のかかしを大鎌でスパンスパンと斬り裂きながら答える。

斬られたかかしは真っ二つになり、パラッ…と雲の地面に倒れていく。

「あはっ、確かにそうだねー。サボってたら“修行”じゃないよね！」

「……………話はそれだけか？ならば、気が散るから話しかけないでほしいのだが。」

メントノフと会話をする間も、修行の手を止めないアルフ。

瞳はかかしではなく遠くの一点を見つめており、冷めた表情である。

メントノフは雲の地面に直接座り込み、じっとアルフの動きを観察していた。

「…つれないなあ、アルちゃん。僕はアルちゃんと仲良くなりたく

て、コミュニケーションとってるのに。」

「……………」

「ねえ、アルちゃんは どうして修行しようと思ったの？ 僕が見る限り、アルちゃんはそのままでも強そうなのに。」

ピタリ…と大鎌を振るアルフの手が止まった。

二時間も修行をしているというのに、呼吸は平静で汗もかいていなかった。

「そのくらい教えてくれてもいいでしょー！ アルちゃんは僕のお弟子さんなんだから！」

「…反対に聞くが、あんたはなぜここで師匠として指導しているんだ？」

「えっ…？」

聞き返されるとは夢にも思っていなかったようで、メントノフは面

食らったような目を見開いた。

「メントノフ・ドルイヤ…心の天使という異名を持つほどの大天使のあんたが、なぜ浄土の師匠を？」

「それはえっと…その…」

メントノフは少し言葉に詰まったが、そうだと思い付いたように声を上げた。

「天使の仕事に飽きたからだよ！毎日毎日、新しい魂を下界に運ぶ…そんな変わりない日常に飽きちゃったんだ。それで、閻魔様をお願いして転職したというわけだよ。」

「……………そうか。」

アルフはそう返しただけで、それ以上は追求しなかった。

「あ…質問の答え、聞いてないよ！アルちゃんは どうして…」

「強くなりたいからだ。」

修行を再開し、アルフは小さな小さな声で答えた。

「強く…？」

「肉体的な強さも勿論だが、精神的な強さも鍛えるためだ。私は…あらゆる状況に耐えうる“力”を得たいのだよ。」

「……………？よくわかんないや。」

メントノフは頭をかきながら、眉を潜めた。

「…“力”とは、暴力で人を従えるものではない。本当に強い“力”とは、心の強さだ。何事にも負けず、自分というものを持ち続けること…あんたのように。」

「僕のように…？」

「……………話し過ぎたな。休憩時間はもう終わりだ。しばらく…一人

で修行させてほしい。」

アルフはそう言うと、その日はもうメントノフと言葉を交わそうとしなかった。

「メントノフ・ドルイヤ：手合わせを願いたい。」

アルフがそうメントノフに申し出たのは、彼が浄土へ来て二ヶ月以上が経った日だった。

メントノフは、その日も退屈そうに雲の椅子に座り込んでいたのだった。

「えっ…？僕と手合わせ…？」

「ああ。」

「いいけど…突然どうしたの、アルちゃん？」

「……………今日までの私の修行の成果を試したいのだよ。」

アルフの表情は真剣そのものだった。

オレンジ色の瞳はじっとメントノフを見据えており、口元はいつもよりもきつく結ばれている。

「修行の成果、かあ…そだね！僕もアルちゃんがどれくらい強いのか見てみたいな！」

「では、早速…始めてもいいか？」

そう尋ねて、アルフは大鎌を胸の前に構え、やや前かがみの姿勢をとる。

「うん！ よーい…始め！」

緊張感の無い掛け声と共に、メントノフが動く。

武器である背中の羽衣を左手にとり、アルフに向かってえいっと投げつけた。

「吸着布！」

羽衣は蛇のようにくねくねと動き、アルフの大鎌にピタリと巻きつく。

「なっ…！？」

振り上げた大鎌を捉えられ、アルフは驚きの表情を見せた。

「くっ…この程度…！」

アルフは大鎌を大きく左右に振り、刃の部分で布をピッと斬った。

斬られた布の切れ端が、パラッ…と地面に落ちる。

「やるね、アルちゃん！」

「…あんたもな。翔転牙！」

今度はアルフの攻撃。

大鎌の柄の端を持ち、自分自身を軸にクルリと一回転する。

「うわっ…とと！」

メントノフは紙一重で攻撃を避けたものの、体勢を崩しよろめく。

すかさず、アルフはメントノフの背後に回り、大鎌を振り下ろした。

だが、

「…………っ!？」

大鎌は地面の雲をわずかに斬り裂いただけで、メントノフの姿は忽然と消えてしまっていた。

「一体どこに…」

「えへ…僕の勝ちだね、アルちゃん!」

アルフの真上からメントノフの声が聞こえた。

左手に携えれた羽衣は、アルフの体をぐるりと一卷きしている。

「…………。」

「アルちゃんさ、一つ訊きたいんだけど…」

「なんだ…？」

「どーして手を抜いたの、アルちゃん？僕はさ…真剣勝負で手を抜く人は好きじゃないんだよね。」

メントノフの表情が険しくなる。

普段の彼女とは別人かのように、瞳は蔑むように冷たくアルフに向けている。

「…なんのことかわからないが。」

「僕は…アルちゃんのことを過信しすぎてたのかな？アルちゃんの手はこんなものじゃないって気がするんだけど…。」

「本気…か。」

アルフは言葉の意味を確認するかのようになり、そう繰り返した。

「そう、僕に見せてよ…アルちゃんの本気を。」

「……………ならば、あんたも見せてほしい。あんたの本気の力を…。」

「えー、疑うの？僕はいつでも本気…わっ!？」

メントノフは、再び体勢を崩された。

ほんの一瞬間の間に羽衣はズタズタに斬り刻まれ、巻かれていたはずのアルフの姿が見えない。

「そんな…まさか…」

「そのまさか、だ。」

「えっ…っ…。」

気付けば、今度はメントノフが動けなくなっていた。

腹部に、正面から大鎌の刃が突きつけられていたのだ。

ほんの少しでも動けば、刃は惑うことなく彼女の腹部を切り裂くであらう。

その大鎌の持ち主であるアルフは、メントノフの目の前に立っていた。

「これが私の本気…だ。」

「ふふ…そうなんだ。」

「…なぜ笑う？」

袋のネズミに違い状況でにこにこ笑うメントノフに、アルフは怪訝そうに訊いた。

「なんだか嬉しくって。本気を見せてくれるってことは、僕を師匠として認めてくれたのかなって思ったから！」

「…別にそういうわけではない。」

「そう返されると思ったよ！でもね、僕が勝手に思うくらいはいいでしょ、アルちゃん？」

メントノフはそう問いかけると、大鎌の刃の先を素手で掴みぶんと放り投げた。

「……………っ！？」

反動でアルフは後ろによろめく。

メントノフは奪った大鎌をアルフに向ける…ことはしなかった。

柄の部分に持ち替えず、指先は刃の先端を持ったまま、前方の一点を見つめていた。

刃でケガをしたらしく、人差し指からはポタポタと赤黒い血が流れ落ちている。

そしてそれは、白い雲をじわじわと赤く染めていく。

「血が…！」

「大丈夫だよ、アルちゃん。僕、全然痛くないから。」

「……………」

メントノフの奇妙な答えに、アルフは怪訝そうに眉を潜めた。

「そう…普通は、ケガをしたら痛いんだよね。慌てて止血するんだよね…でも、僕はそうしない。失う物が無い者は…強いんだよ。」

「何を言っているんだ、あんた…？」

「アルちゃん、この前言ってたよね。『僕のように強くなりたい』って。だけどね、僕を目指すのは止めたほうがいいよ？僕は…“落ちた者”だから！」

メントノフはそう宣言するように言うと、大鎌をゆっくりと雲の地面に置き、どこかへ飛び去ってしまった。

雲の地面には、彼女の指から流れた血が、道しるべのように転々と落ちていく。

アルフは、刃にべっとりと血がついた大鎌を拾い上げ、

「……………そういうことか。」

全てを理解したように呟いた。

「やっぱり…ダメだった。」

浄土の北部にある公園。

今ではすっかり血が止まった右手を見つめ、悲しげに言った。

（痛みを感じることができるようになれば…僕の“罪”は許される。
そう…閻魔様は言ったけど、まだ許されていないんだ。）

封じていたはずの悲しい記憶。

それが彼女の中に蘇ってくる…。

『命を…何だと思っているんだ!?!』

『ご…ごめんなさい…。でも、僕…』

『お前は“あの子が…そして“あの子の親になるはずだった男女”
がどれだけ苦しい思いをしているのか…。わかっているのか!?!』

『本当にごめんなさい…。僕…どうやって償えば…?』

『落ち着いて下さい…メントノフはわざとそうしたわけじゃ…』

『うるさい！お前は…引っ込んでろ！』

『…っ…！？う…わああ…！？』

『タ…タイちゃああん！！』

「こんな所に居たのか…。」

「ア…アルちゃん…。」

メントノフに声をかけてきたのはアルフだった。

彼女の正面から歩いて来ると、向かって右隣の椅子に腰を下ろした。

「……………堕天使、なんだな。」

アルフの一言に、メントノフの体がびくつと反応する。

「だからどうというわけではないが。」

「訊かないの？ 僕の過去のこと…。痛みを感じない罰のこと…。僕の罪のこと…。」

「興味無いな。だが…話したいなら勝手に話せばいい。それで、あなたの気が済むならな。」

「…興味無いとは失礼だな、アルちゃん。」

メントノフは、クスツと小さく笑った。

「……………僕はね、癒やしの天使だった。天使の仕事は…新しい命を下界に運ぶ素敵な仕事。恋人のタイレン…タイちゃんと一緒に働いて、たくさんの人の笑顔を見て…幸せな毎日だったなあ、あの頃は。」

「…幸せ、か。」

「だけど、ある日：僕は全てを失った。僕自身が起こした大きな失敗でね…。」

メントノフは自分を抱くようにして両手を両肩に回し、悲しげにうつむいた。

体は小刻みにフルフルと震えている。

「……………」

アルフは無言でメントノフを見つめた。

「あの日：僕は一人で仕事していた。タイちゃんをびっくりさせようと思ったんだ。違う意味でびっくりさせることになったんだけどね…。天気は…大荒れだった。地面を叩きつけるような大雨に：台風並の強風。仕事に向いてる天気じゃなかった。だけど：仕事をもらった僕は、新しい命を届けに行っていた。もう少しで目的の家に着くって時に、今まで以上の突風が吹いて近くで雷が鳴って…」

「新しい命を落としてしまったというわけか…。」

要約するアルフを見返し、メントノフは無言でうなづく。

「新しい命は：川の中に落ちた。激しい急流に巻き込まれ、あつという間に：流れていった。僕は：呆然と見ていることしかできなかったんだ…。」

「それが堕ちた原因となる“罪か…”。」

「それだけじゃないよ。もう一つ：あるんだ。：天界に報告に戻った僕は、上司からたっぷりお説教を受けた。“責任はとれるのか”ってね。僕が困惑してどうすればいいかわからなくなった時：タイちゃんが庇ってくれた。けれどそのせいで、タイちゃんは：上司に突き飛ばされ、態勢を崩してクラウドホール：雲の穴に落ち消滅した。」

全てを語り終えたが、メントノフは力なくアルフに微笑みかけた。

「僕のこと：軽蔑していいよ。僕は、最低な堕天使…」

「師匠。」

「えっ…？アル…ちゃん？」

メントノフは、アルフの呼び方の変化に驚いたような声を上げた。

しかし、アルフは何を驚いているのかといわんばかりに平然としている。

「僕のこと…何って？」

「…師匠と呼びました。あんたは、堕天使なのかもしれない。けれど、それが何だというんですか？私にとっては、様々なことを教えてくれる師匠です。」

「アルちゃん…。」

「…修行を見て頂けませんか？至らない所があれば教え…」

「アルちゃああん…！」

「なっ…？」

不意にメントノフに抱きつかれ、アルフは面くらったような顔をした。

けれど、メントノフの手を振り払おうとはなしなかった。

「アルちゃん…僕は痛みを感じれない。泣けない…。だけど、アルちゃんの優しさが胸に響いて心が痛くて泣きそうだよ…。ありがとう…アルちゃん。」

「…どういたしまして、師匠。」

端的に言葉を返すと、アルフは小さな子をあやすようにメントノフの頭を数回撫でたのだった…。

堕天使…その事実是不変ならない。

僕にできることは、限られているのかもしれない。

けれど…僕は、アルちゃんを守るためなら何でもする。

僕の心を救ってくれた…大切な大切な人だから。

タイちゃん…僕、頑張るから。

もう少しだけ、僕のこと…見守ってね？

—T o b e c o n t i n u e d—

真実の歌

「最初から気付いてた…。この戦いは…“終わっていた”ということに…。」

硝煙を上げる銃を片手に、少女は力無く笑って言った。

茶色いウェーブ髪は重力で下に流れ、黄緑色の瞳は真っ直ぐに二人を見つめている。

「終わっていた…?」

思わず閉じてしまった桃色の瞳を開け、大鎌を持つ女性は聞き返す。

左腕で抱えている茶色い髪の少年は、銃声のショックで気絶してしまっていた。

「あなただって、薄々は感じていたんだよね、セズリカ？この戦いの勝敗なんか“彼ら”にとっては、どうだっていい。大事なのは…」

「ルティーナ・プルリエ…それを呼び出す過程…か。」

セズリカと呼ばれた死神は、全てを理解したかのように低い声で呟いたのだった…。

大鎌の柄は、赤髪の少年の鳩尾を数ミリの狂いもなく直撃していた。

「うっ……………兄…貴…。」

「すまない…リアゼ。私にはまだ…やるべきことがあるのだよ。」

トサツ…と自分に倒れかかってきた少年…リアゼの体を支え、“兄貴”と呼ばれた青年はふうとため息をついた。

緑に近い青髪が微かに揺れ、オレンジ色の瞳はどこか遠くを見ていた。

「終わっていたんだな…全ては。早く気づくべきだった…。」

リアゼの体を雲の地面にそつと横たわせると、青年死神は足早にその場を立ち去ったのだった…。

「大人しくしている方が身のためですよ…。」

「…………っ。はは…一本取られちゃったか…。」

首筋に三叉槍を突きつけられ、黄色髪 of 死神は苦笑していた。

「…ラトラ!? どうして…?」

「この程度で負けるようでは、アイヌダの名に恥じますからね。それより…イリア・ザルメス。彼をどうすべきですか?」

「…………仲間なんだよ、シークは。だから…お願いっ!」

イリアと呼ばれた桃色のツインテール髪を持つ少女は、嘆願するように琥珀色の瞳を潤ませた。

ラトラというらしい悪魔は、そうですか…と返すと三叉槍を持つ手をスツ…と下ろした。

「ふう…まさか嬢ちゃんに助けられる日が来るとはな。考えもしなかったぜ…。」

身動き可能になった黄色髪の死神：シークは、ハハッといつものように豪快に笑うと、あっという間にどこかへ飛び去っていった…。

「信じたくなかった…けれど、これが私とあなたの現実なんですね。」

ルティーナ・プルリエは、自分に言い聞かせるように呟いた。

鮮やかな紫色の瞳は、真っ直ぐに目の前の死神を見つめている。

「そうさ…ルティーナ。夢の時間はもう“あの時”に終わったんだ…。そして、逃れられない現実がここにある。」

黒いフードで顔を覆い隠した死神は、補足するように彼女に言った。

「あの時…?」

ルティーナの隣に侍立しているエマ・プルリエが尋ねる。

「僕が消滅したとき、エマ・プルリエ。」

そう言って、死神はフードをとる。

茶色い前髪が、バサツと落ち死神の鼻までを覆う。

「……………!? 君はまさか…」

「ファイド・クリック…。かつて、そんな名前で呼ばれていた死神さ。」

目を丸くしているエマに、青い翼を広げたその死神はニッと微笑みかけた。

「それにしても…意外だったよ、ルティーナ。君は…難聴じゃなか

ったのかな？」

「…天界は、全ての機能を増長させる。私の耳がなぜ今は聞こえているのか…それはあなたがよく知っているはずです。」

「ああ…そういえば、そうだったね。今の僕としての生活が長すぎて忘れていたよ。」

今の僕という言葉に、エマは怪訝そうに眉を潜めた。

「…どういう意味さ？君はファイド・クリック…姉さんの恋人で、遥か昔に消滅したはずなんじゃ…？」

「さあね？これ以上の答えを知りたければ…力づくで言わせてもらんよ。」

ファイドはそう挑戦的に言うと、シュツとルティーナの目前に移動した。

「あっ…」

「さよなら、ルティーナ。美しい恋人よ。」

ヒュッ…と大鎌の刃がルティーナの額に振り下ろされる。

「させない!!」

ガチッ!

寸手のところで、エマの大鎌がそれを防ぐ。

「エマ…!」

「姉さん…逃げて!自分がここは食い止めておくから…!」

カンッ!

短い鏢迫り合いの後、エマの大鎌がファイドの大鎌を弾き返す。

「やるね、エマ。」

ファイドは、一旦離れ態勢を整え直す。

「だけど…エマ…」

「早く！」

「……………わかったわ。」

ルティーナはくると踵を返し、タツと走り出す。

だが、

「きゃあ!？」

「姉さん…!」

待ち構えていたらしい死神に、左腕をがっしりと掴まれ身動きを封じられてしまった。

「君の声…フィル・ティディオ…？」

「やあ、エマか。久しぶりだね。」

フィルと呼ばれた死神は、ルティーナを右腕に抱いたまま微笑んで言葉を返した。

「……っ…離して…」

「離したら逃げちゃうから、それはできないな。」

ルティーナはジタバタもがくが、ビクともしなかった。

「フィル…機転を利かしてくれたのは誉めたいところだけど、彼女は僕の獲物だ。君は妹の方の相手をしてくれ。」

「ふふ…仰せのままに。」

「あっ…。」

フィルはファイドの命令を聞き、ルティーナを離す。

ルティーナは面食らったような顔をして、フラフラと後ずさった。

「さて…と。」

フィルはエマに視線を移し、瞬時に彼女の後ろに移動する。

「後ろ…!?!」

「大鎌よ、悲しさを歌え…プレリユード!」

「やあっ!?!」

フィルの大鎌から吹き出した濁流は、エマを水の渦の中に包み込む。

「エマ…！」

「他人の心配してる暇は無いよ、ルティーナ。」

不意に前方にファイドの声を聞き、ルティーナはハッと気づき身構える。

しかし、反応するのが少し遅かった。

「…っ……やっ…」

ドスッという鋭い音と共に、局所から全身に広がる激痛。

彼女の腹部には、ファイドの大鎌の刃が深々と突き刺さっていたのである。

「ファイ…ド…。」

ドサツとルティーナの体が、雲の地面に崩れ落ちる。

傷口からは多量の鮮血が流れ、それは白い雲を赤く染め上げていく。

「ルティーナ…安らかに眠るといいよ。」

ファイドは、ポケットからバラの花を一本取り出すと、ルティーナの背中の上にそっと置いた。

「そっちはどうだい、フィル？」

「ふふ…こっちも終わり…」

バシユ!!

フィルの言葉を遮るように、エマを覆う水が周りに飛び散った。

そして、

「なんとか間に合って…もねえか。」

エマを両手で抱いたシークが現れた。

「ごほっ…！来るの…遅いよ…シーク…。」

「おう…悪いな。こっちもいろいろあったもんでな。」

シークは、エマを雲の地面に座らせると、大鎌を胸の前に構えた。

「姫を守るナイトの登場だね。いいさ…二人まとめて相手してあげるよ。」

「へっ…ナイトなんて柄じゃねえな。こいつが居ねえと、ちつとばかり物足りねえってただけだぜ、俺の理由は。」

フィルとシークは同時に動く。

瞬時にお互いの目前に移動したかと思うと、二つの大鎌は空中で激

しい火花を散らし始めた。

「シーク…。」

「…つまらない。」

「えっ？」

ポツリと言葉を漏らしたファイドに、エマは視線を移す。

「ルティーナ・プルリエ…天界の予言者とはいえ、所詮はただの人間だったのか…？」

「……………！！姉さん…？」

まだ呼吸が荒いエマの瞳に映ったのは、血まみれで倒れているルティーナの姿だった。

長い黒髪で顔は覆われ表情は窺えない。

「姉さん…まさか…？」

「ああ…気づいたのか、エマ？だが、もう遅いよ。ルティーナは…死んだ。」

「死ん…だ…？」

エマは金槌で打ちつけられたような衝撃を頭に感じた。

まるで金縛りに遭ったかのように、体もそして心も停止する。

「死んだ…姉さんが…。天界の予言者…ルティーナ・プルリエが…
…嘘……………だ……………」

「なんだか物足りない気分だよ、僕は。だから…君も消してやるよ、エマ。」

ファイドは大鎌の矛先を呆然としているエマに向けた。

「エマ!!」

「よそ見してる暇は無いよ？」

「ちっ…!!」

シークは、エマを助けに行こうと高度を下げたがファイルが行く手を遮った。

「行きたいなら、私を倒してからにしてほしいな。」

「くっ…エマ…!!」

シークの必死の叫びも、エマの耳には届かない。

「さよなら、エマ・プルリエ。」

「姉さん…………。」

ファイドの大鎌の刃が、次はエマを貫く…！

かと思われたが。

「させない！！」

カンッ！

直前で、攻撃を弾いた者が居た。

「……………っ！」

予想外の敵に、ファイドは少しだけたじろぎ一旦距離を置く。

「エマ！今は…戦いに集中しなきゃ！！」

エマの両肩を掴み、叱咤激励したのはイリアだった。

いつもの彼女に無く、表情は険しく本気で怒っているように見えた。

「イリア・ザルメス…か。」

ファイドは悔しげに、ギリツ…と唇の端を噛む。

「イリ…ア…？」

「下がってねっ、エマ！」

イリアは、エマを引きずるようにして下がらせると、ファイドに向き直った。

「エマを悲しませる者は…イリアちゃんが許さないっ。…本気でやるからね？」

凄みを利かせて言うと、イリアは二本の大鎌を両手に構えた。

「本気…だと？笑わせてくれるな、イリア・ザルメス。君が僕に勝てるだけでも考えているのか？」

「やってみなきゃ…わかんないよっ!!」

言葉を返すと同時に、イリアは大きく翼を広げ、ファイドの前に動く。

ファイドは、慌てず余裕の表情で身構えた。

「やあっ!!」

ガキッ！

イリアの二本の大鎌が、ファイドの大鎌と擦れ合う。

「…なかなか重たい攻撃だね。だけど…っ!？」

カンッ！

短い鏢競り合いの後、イリアの鎌がファイドの鎌を遠くへ弾き飛ばす。

大鎌はポテッ…と音を立てて、遥か離れた雲の上に落ちた。

「やるな…嬢ちゃん。」

視線はフィルから逸らさずに、シークがほうと息を漏らした。

「どう…？これがあたしの本気だよっ。」

見下すような表情で言うと、イリアは二本の大鎌の刃を重ね合わせる。

そして、

「二連牙!!」

そのまま素早く振り下ろす。

「ミトウ！ シス！」

「はい、フィル様！」

「…はい！」

ガツッ！！

フィルの命を受け、イリアの攻撃を矛で受け止めたのは、ミトウとシス。

左はミトウ、右はシスが請け負っていた。

「……………フィルの手下か。」

ファイドは、何気なく呟きその場を二人に任せるかのように、フツと後方に移動する。

「後斬り!!」

「ふふっ…面白い攻撃だね、シーク・ルスタリィ。」

カンッ!

ガガッ!!

空中では、少しの油断も許されない限界のバトルが展開中だった。

「そこ…どいてよっ! イリアちゃんの邪魔したら…」

「どくわけないじゃんか。…ダイヤル0、雷撃!!」

シスが鉾のダイヤルを回すと、辺り構わずゴロゴロと雷が轟き、

「行っちゃってー、毒蛾ちゃん!!」

ミトゥが鉾を振ると、百羽近い数の蛾が出現しイリアに向かって行った。

「……っ……きゃっ!？」

雷は全て避けたが、不規則な動きをする蛾達は避けることができなかった。

「…イリア!」

叫び声でハッと我に返り、エマは急いで舞を始める。

…が、蛾がイリアの体を侵略するスピードには到底間に合いそうもない。

「誰か…助け…て……………」

「イリアー!!」

「…………断末魔の豪風！」

エマの声に混ざって、違う声が聞こえた。

その瞬間、竜巻のゆうな風が出現し、イリアを取り巻いていた蛾を全て巻き上げてしまった。

トサツ…と、イリアの体が雲の地面に落ちる。

「…なんとか間に合ったか。」

「アルフ…！」

エマの視線の先に居たのはアルフだった。

右手に大鎌を携え、瞬時にシュツ…とエマの隣に移動してきた。

「状況は…最悪のようだな。」

「アルフレッド・フィアラ…君か。救った恩を仇で返すつもりなのか？」

「フアイド・クリック…。」

アルフの視線とフアイドの視線が重なった。

二人とも敵対しているような、厳しい目つきをしている。

「なら、君も消してあげるよ。…ルティーナ・プルリエやメルディアン・イーグルのように儚く散るといい。」

「……………」

アルフはフアイドを睨み、素早い移動でフアイドに斬りかかる。

ガキッ！

ファイドは、にやにやと笑いながら軽々と攻撃を受け止めた。

「命を…何だと思っている？」

「命？さあ、わからないな。君や僕のようになかなか消滅しない存在から見たら、命なんて大したものじゃないだろう？」

「…ふざけるな！！」

ガンッ！

「……………うっ！？」

アルフの大鎌が、ファイドの大鎌を叩き落とす。

アルフは、ファイドの眉間に刃の先を突きつけた。

「アルフ…。」

「フアイド様は忙しいみたいだからー、また私と遊ぼっ、エーマ。」

「舞女…今度こそ消してやる。」

「……………っ!？」

息つく暇なく、今度はエマの前にミトウとシスが立ちはだかる。

「行っちゃってー、毒ヘーびちゃん!」

「ダイヤル壺、氷槍^{ひょうそう}!」

無数の黒蛇と、何十本ものつららがエマに猛スピードで向かっていく。

「花鳥風月、幻惑の妖桜!」

エマは舞で対抗する。

桃色の桜の花びらが辺り一面に舞い、毒蛇達は狂ったように闇雲に暴れ出した。

また、つららは花びらに当たると溶けていくように消えた。

「やるねー、エマ！痺れちゃいそー。」

「ちっ…今度はこれだ！ダイヤル式…炎輪！」

ミトウは目を輝かせて賞賛し、シスは鉾のダイヤルを再び回す。

炎の渦が空中から出現し、ゴウウウ…とエマを囲む。

「花鳥風月…狂気終鳥歌。」

エマは先ほどとは違う舞で応戦した。

白い鳥が何十羽も出現し、それは餌を食べるように炎を啄んでいっ

た。

「……つたた。エマ…アルフ…？」

凄まじい音を頭上に感じ、イリアが目を覚ます。

上半身だけ起こし見上げると、アルフがファイドに向けて大鎌を振り下ろしているところが見えた。

と、その時だ。

『もう…やめて。』

女性のか細い声が辺り一帯に響き渡る。

「……………っ!？」

声に驚き、アルフは寸前でピタリと手を止めた。

「この声は…」

「ルテイナー・プルリエ…。」

シークとフィルは、お互いに距離を置き一気に決めようとしていたところだった。

が、彼らも声に反応し、戦いを中断する。

「姉…さん…?」

「ルテイナーさん?」

エマとイリアが声の方向：ルテイナーの遺体を見つめると、その体からはオレンジ色の光が放たれているのだった。

そして、

『もう…やめて、こんな無益な戦いは…。』

“死んだ”はずのルティーナが、むくりと起き上がった。

「ルティーナ・プルリエ…!？」

『淡い夢終わり近付き、悲しみが襲う。けど今負けたくなくて、歌う真実の歌。』

誰か助けるためなら、この命かけて。あなたにも目を覚ましてほしいから、私は歌い続ける』

ルティーナは歌った。

「この声は…」

「ルティーナ・プルリエ…。」

シークとフィルは、お互いに距離を置き一気に決めようとしていたところだった。

が、彼らも声に反応し、戦いを中断する。

「姉…さん…？」

「ルティーナさん？」

エマとイリアが声の方向：ルティーナの遺体を見つめると、その体からはオレンジ色の光が放たれているのだった。

そして、

『もう…やめて、こんな無益な戦いは…。』

“死んだ”はずのルティーナが、むくりと起き上がった。

「ルティーナ・プルリエ…！？」

『淡い夢終わり近付き、悲しみが襲う。けど今負けたくなくて、歌う真実の歌。誰か助けるためなら、この命かけて。あなたにも目を』

覚ましてほしいから、私は歌い続ける』

ルティーナは歌った。

優しく…悲しく…儚く…美しく…。

誰もが聞きほれてしまう、レクイエムの時と同じ歌声。

『さよなら…。』

歌い終わると、ルティーナはそう一言だけ呟き…

「ぎゃっ!?!」

「おわっ!?!」

「くっ…!?!」

「うっ…!?!」

白い光に包まれ、その場に居た全員の姿が消えた。

「……………うつ…てえ…。」

リアゼは腹部を左手で押さえながら、やっとのことで上半身だけ起こした。

意識はぼんやりしており、体は鉛のように重い。

「俺、兄貴を消そうとしたんだっけ……………最低だよな。」

リアゼは、へへッと自嘲気味に笑うと辺りを見回した。

近くに何人かの死神が倒れているのが見えた。

「お、おい…おまえら、大丈夫かよ…?」

倒れている全員に聞こえるように、大声で問いかけるリアゼ。

「いったた…。」

「……………っ。」

起き上がった二人の死神、それはピンクの髪を持つ少女と、緑に近い青髪を持つ青年だった。

「ピンク娘に兄貴…!?」

二人の顔を見て、リアゼは信じがたいことのように目を見開いた。

「ふえっ…? リアゼ…?」

「…………。どうやら…強い力であの場から弾き飛ばされたようだな。」

イリアは目をこすりながら起き上がり、アルフは冷静に考察していた。

「じゃあ、あとの二人は…もしかして…」

「…っ…ここあ…どこだ…?」

「痛たた…災難だよ、全く…」

リアゼの予想通り、目を覚ましたあとの二人の死神とは、白い長髪を持つ女性と赤髪の男性だった。

「シーク…エマ…。」

「んあ…? リアゼじゃねえか。」

「君…こんなところで何してんのさ?…まあ、人のこと言えないけ

ど。」

シークは寝ぼけ眼で言って、エマは小首を傾げていた。

「ちょっと、あんた！どこ、ほつつき歩いてたのっ！？こっちは、とーっても大変だったんだからねっ！」

イリアは立ち上がると、すぐにリアゼに詰め寄った。

「お、俺は…その…」

「そういえば…シークもさっき来たばかりだっけ？…どこに消えたのさ？」

エマは冷たい視線をシークに送った。

いや…それはだな…と、シークもややたじろぐ。

「…落ち着け、エマ、イリア。今はそんなことを追求している場合

では…」

「アルフは黙ってて！」

「君は黙ってな。」

「…………。」

諭そうとしたアルフは、二人に睨まれ口を閉ざした。

「まさかあんた…あたし達を裏切って、オリジナル側に居たんじゃないでしょうねっ？」

「へっ！？ いや…それには深いわけが…」

「問答無用！裏切り者は…イーリアちゃんが鉄裁するからっ！とりや！…！」

「…のわっ！？」

ドカツ！！

イリアの強烈な足蹴りがリアゼの背中にヒットする。

リアゼは、ドタツと雲の地面に前のめりに倒れた。

「こっちも…鉄裁だね。はあっ！」

「話を聞け…って、どわっ!？」

エマはシークを一本背負いした。

シークの体はグルンと宙を舞い、少し離れた地面にトサツと落ちた。

「…ま、冗談はこのくらいにして、と。結局…フィルとその部下の二人、それから…ファイドには逃げられてしまったんだね。」

「……………そういうことになるな。」

「エマ…。」

イリアが心配そうにエマを見上げる。

「あっ…大丈夫だよ、イリア。悲しむだけ悲しんだら…なんだか吹っ切れたんだ。…彼らを許しはしないけどね。」

エマは左手の拳をぎゅっと握り、右手でイリアの頭を撫でる。

「無論だ。命を弄ぶ者を許すことなど私もできない。それに…だ。欲に捕らわれていたファイド・クリックが、このまま素直に引き下がるとも思えない。」

「ファイドは、天界を崩壊させる気だ。」

五人の中の誰でもない声が、上空から聞こえた。

「えっ…?」

「痛ってえな…バカ力女が。…って、セズリカ…!」

リアゼが背中をさすりながら、声の主の名を呼ぶ。

名を呼ばれた死神…セズリカ・ミルハはストツ…と、五人の輪の中に降り立った。

「私も居るよー。」

「兄さん！みんな！」

「…ふう。振り出しに戻ってしまったようですね。」

続いて、天使…ナレミ・ビバルディ、狭間の死神…カナル・ティデオ、悪魔…ラトラ・アイヌダが降り立つ。

「天界を崩壊させるって…ええっ！？嘘でしょ…？」

「…本当だ。ファイドの右腕として仕えていた私が言うんだからな。」

驚くイリアに、淡々と答えるセズリカ。

彼女は続けた。

「私は…オリジナル側だ。けれど…今は君達と争う気は無い。むしろ、協力したいのだよ。」

「…そんな都合のいい話、信じられないね。君も…姉さんを殺したファイドの仲間なんだろう？」

エマは、敵意の視線をセズリカに向ける。

「…………その件はすまなかったと思っている。ルティーナ・プルリエを殺すなんて…私は聞かされていなかった。」

「聞かされてなかった…？ そんなんで許されると思って…」

「ちょっと待った！ セズリカを責めるなら…俺とシークも同罪になるんだよ。セズリカは本当に知らなかったんだ…許してやってくれよ、エマ。」

今にもセズリカに突っかかりそうなエマの前に立ちほだかり、リアゼが言った。

「リアゼ…。」

「んー、セズリカは本当に協力してくれるみたいだよー。私が保障するー。」

「……………わかったよ。」

ナレミにも補足され、エマは渋々ながらも引き下がった。

「それで…天界崩壊の話ですが。ファイドとかいう彼を倒せば、食い止められるのでは？」

と、ラトラ・アイヌダ。

「あの…何が何だか、僕にはよくわからないんだけど。」

話になかなか入れない様子のカナルは、右手を上げて控えめに発言する。

「とにかく…閻魔のところまで、一旦引き返すべきだな。ここで議論していても、埒が明かない。」

アルフが言って、

「さんせーい。」

「うんっ！」

「おう、戻るか。」

「…了解っす。」

「ああ、それがいいね。」

賛成多数で、とりあえず地獄に戻ることに決まったのだった…。

「やってくれるな：エマ・プurlie。ララバイを歌われるなんて：予期できない展開だったよ。」

暗い暗い一室。

ファイドは、悔しそうに親指の爪をギリツ：と噛んだ。

「これからどうするんですかー、ファイド様ー。」

「…天界を崩壊させる。」

ミトウの質問に、ファイドは間髪を入れずに答えた。

「…本気なんですか？アルフ達が何か作戦立てて邪魔してくると思うんですけど。」

「本気さ、シス。アルフやエマ…彼らを筆頭とした者達に向かってきたところで、僕を止めることなどできない。」

「ふふ…最後までお供しますよ、ファイド様。」

ファイドに一礼しながら、フィルがにっこり笑って言ったのだった…。

—
T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
—

宴の終焉（前書き）

えっと…死神のお仕事最終回です（・ω・）／

宴の終焉

終わる…終わる…何もかも…。

終わる…終わる…世界が終わる…。

終わる…終わる…そして、始まる…。

天界、場所未明。

「トレメンデス（絶対神）様…。ファイド・クリックは、あなた様に抗い、天界を崩壊させるつもりです。…処分はどういたしますか？」

虹色の光が差し込むバルコニー。

絹の頭巾を被った男性の神が尋ねた。

「捨て置け。気にするほどのことではない。」

トレメンデスと呼ばれた女性は、男性の神に背を向けたまま答えた。

腰まである亜麻色の長髪が、わずかに揺れた。

頭部には、銀色の冠のようなものを被っている。

「しかし…」

「かの者の末路は見えている。万が一の事態が起こった場合は、我が直々にかの者を葬り去ろう。」

「私方はどういたせば…?」

「引き続き、かの者らを観察。都度、報告せよ。」

トレメンデスの言を受けると、男性の神はビシッと敬礼し、すぐにどこかへ飛び去って行った。

「ファイド・クリックに…アルフレッド・フィアラか…。くく…久々に楽しい宴が起こったものよう…。」

トレメンデスは一人呟くと、おかしそうにクスクスと笑ったのだった…。

「ふむ…ファイドがそのようなことを…。」

閻魔は、珍しく深刻そうな表情をしている。

地獄には、数十人の天界人が集まっていた。

「だけど…どうやって、天界を崩壊させる気なのかなっ？うーん…？」

イリアが首を傾げて考え込む。

「大きな爆弾を爆発させるとか…？」

と、カナル。

「一番手っ取り早い方法は、絶対神を消すことだが…恐らくそれは避けるだろう。二次策として考えられることは…」

「魔人と手を組むこと、ですね。彼らは、潜在的に破壊能力を持っていますから。」

セズリカの言葉を、ラトラが引き継いだ。

「魔人…か。まさか、懺魔を目覚めさせる気なのか…？」

「ええっ！？あんなに苦勞して倒したのに、そんなことされたら堪えないよ…。」

アルフの推測に、カナルがはああと深いため息をつく。

「懺魔…？誰だよ、そいつ。」

リアゼが眉を潜めて、カナルに訊く。

「えっと…閻魔様のお兄さん、だったと思う。一年前に僕と兄さんが倒した敵だよ。」

「ほう…それで、そいつはどこに眠ってるんだ？」

「えっ…そこまでは、わかんないよ。あの後…僕は気を失ってちゃったし、兄さんも居なかったんだから。」

おいおい…と、シークが呆れ顔で突っ込んだ。

「…絶対神に訊けばわかるんじゃないのー。」

間延びした声で言ったのは、ナレミ。

皆の視線が一斉に彼女に向けられた。

「君…本気で言ってるの？絶対神と言えば、人の生死、そして全てを司る神。自分達が近付ける存在じゃないのにさ。」

「本気だよ？あのわがままおばさん…私なら説得できるし。」

「わがままおばさん…?」

きよとんとした表情で、カナルが言葉を繰り返す。

「ナレミ…。何か、弱みでも握っているというのか?」

「…まあねー。あのわがままおばさんは…私の母親ってだけなんだけどー。」

セズリカの質問に、ナレミは平然とそう言ってのけた。

「なっ…!?!」

「ええっ!?!」

「まちかよ、それ…。」

アルフ、イリア、リアゼは同時に驚きの声を上げた。

「ほう…それは初耳だな、ナレミ・ビバルディ。だが、好都合じゃ。ファイドらも、さすがにそのことには気付いておらんだろ。」

「なるほど…。絶対神を味方につければ、勝機はありますね。」

傲慢の長い髭を撫でながら言う閻魔と、にやつと笑うラトラ。

「では、ナレミ・ビバルディよ。ここにおる者達をトレメンデスのところへ連れて行ってやれ。」

「…面倒い。場所教えるから、ナレミ以外のみんなで行ってよー。」

「娘のそなたが行かんでどうするのじゃ…。」

「んー、あのおばさん…会いたくないんだけどなー。閻魔様の頼みなら…しょうがないか。」

閻魔の説得に渋々納得し、付いてきてとナレミは高く飛び立つ。

他の者達は、ナレミに従い素直に後を付いて飛んでいくのだった…。

「天界崩壊なんて…させないよ！」

暗い暗い一室。

ファイドにフィル、ミトウにシスが集まるその場所に、一人の侵入者があった。

短い青い髪に灰色の瞳、そして頭に白いはちまきを巻いた者であった。

幼い顔立ちで、身長も10歳になるかならない子供と同じぐらいの低さである。

「…誰だい、この子供は？」

「メントノフ・ドルイヤだね、久しぶり。」

ファイドの質問に、すかさずフィルが答える。

「あんた…フィル様にやられたくせに、また懲りずに来たわけ？」

「僕はアルちゃんの盾になるために来たんだ！どうしても計画を実行するっていうなら…僕を倒してから行ってよ！」

メントノフは、背中の羽衣を右手に携え豪語してみた。

「ほう…それは面白い。」

「えっ！？後ろ…！？」

ファイドはククツと笑うと、メントノフの背後に立つ。

「せいぜい、楽しませてくれよ？」

ファイドが大鎌をヒュッ…と一振りすると、青色の衝撃波が出現した。

そしてそれは、信じられない速さでメントノフに向かっていく。

「うわあ!？」

メントノフは、とっさに右に避けた。

衝撃波は対象を失い、ボコツという音を立て、彼女の後ろの壁に穴を開けた。

「素晴らしい瞬発力だ…メントノフ。」

「えへへ…誉めてくれて、ありがと!吸着布!!」

「……………んっ?」

次はメントノフの攻撃。

ポイツと投げられた布は、ファイドをぐるぐる巻きにしてギュツと締め付ける。

「どうだ！」

「…フィル。」

ファイドは慌てることなく、フィルの名を呼んだ。

「ふふ…わかってますよ。」

フィルは短く答えると、大鎌を軽く降る。

すると、シュツと擦れたような音がし、ファイドを纏っていた羽衣を細かく切り裂いた。

「あっ…!?!」

「もう一つおまけに：クレイドルソング！」

フィルは、すぐさま大鎌を高く掲げた。

刃から桃色の音波が発生し、辺りを包む。

「うっ…しまっ…たあ……………」

身構えていたメントノフだったが、眠気を誘うこの攻撃には耐えられなかった。

体の力がフツ…と抜け、ドサツとそのまま床に崩れ落ちる。

「上出来だ、フィル。」

「お褒めにあずかり光栄ですよ、ファイド様。」

この人どうするんですかと、ミトウの間延びした声が聞こえる。

「牢屋は無いからな。その辺の柱にでもつないでおけ。」

「りょーかいしましたー。」

「…了解。」

ミトウとシスは承ると、メントノフの両腕を奥の柱に縄で縛り付けたのだった…。

二人の門番は、何奴だとナレミ一行の前に立ちはだかった。

そこは天界には珍しく、金色の光に覆われた神堂だった。

「僕達は怪しい者じゃありません。絶対神に訊きたいことがあって…」

「絶対神様、だ！」

ラトラの言葉に、門番は過剰なほどの反応を示した。

「別に、様なんか要らないんじゃないの…あのわがままおばさんには。」

「な…何という侮辱を！タダでは許さな…」

「ま、待て！この口調…もしや、ナレミ様では！？」

もう一人の門番が、やや大きめの声を上げた。

「ナレミ様あ…？絶対神様とどういう関係だ？」

「おまえは新人だから知らんのか…。ナレミ様は…」

「わがままお婆さんの娘。」

門番の言葉を、ナレミが早口に引き継ぐ。

その言葉を聞いて、後輩らしき門番は目を白黒させていた。

「ご、ご息女様であられましたか！し、失礼いたしました、どうぞ中へ！」

「ささ…ナレミ様。親子の感動のご対面をお果たしませ。」

「…感動しないと思うけどー。」

ナレミはそう返すと、堂々と中へ入っていく。

「お、お邪魔します。」

「失礼しますっ。」

カナルとイリアを筆頭に、一行も次々と入室していった。

神堂内は、虹色の光で満たされていた。

壁は白、床はガラス張り。

教会のような造りだった。

「聖なる我が住居を、土足で踏む荒らす主らは何者ぞ？」

部屋の一番奥のバルコニーのような場所から声が聞こえた。

声の主は、亜麻色の長髪と藍色の瞳を持つ女性。

頭には銀色の冠が載っている。

「あれが、絶対神…トリメンデスカ。」

「ほう：絶対なる権力を持つ神つつうだけあって、雰囲気から違うな。」

アルフとシークがしみじみ呟く。

「私達は、閻魔の使いだ。天界の崩壊を食い止めたい。故に魔人：懺魔の眠る場所を教えていただきたい。」

セズリカが凜とした表情で端的に言った。

トリメンデスは、何がおかしいのか、くくつと小さく笑った。

「自分達の話：どこか変ですか？」

「イリア達は真剣なんですっ！教えて下さいっ、さもないと力づくで…。」

不機嫌そうに眉をしかめるエマと、大鎌を胸の前に構えるイリア。

「くく…やはり、そう来おったか。答えは“ノー”よ。」

「…なんでだよ！天界が壊れたら、下界も壊れる。何もかも…絶対神のおまえさえ消えるってーのに！！」

「落ち着け、リアゼ。…ここで絶対神の機嫌を損ねちゃったら、全部が無意味になるぜ？」

今にも噛みつきそうな勢いで吠えるリアゼを、シークが押し止めた。

「理由は…何ですか？僕達、あなたに何もしてないって思うんですけど…」

「賭けをしていたのだ、とある人物とな。どちらかに協力すれば、イカサマになってしまう。それが理由ぞ。」

カナルの質問に、トリメンデスは真顔で答えた。

「…とか何とか言って、怖いだけなんじゃないのー？」

会話に水を差したのは、すまし顔のナレミ。

トリメンデスの表情が、見る見る内に陰しくなった。

「^{わらわ}妾が怖がっている…だと？」

「賭けの話はデタラメで、懺魔とかファイドとかが怖いから、逃げてんでしょ？」

「ナ、ナレミさん…。絶対神様を挑発しちゃダメ…」

冷や汗をかいて止めようとするカナルに、ナレミはパチツとウィンクをしてみた。

まるで、任せと言っていているかのように。

（ナレミさん…もしかして、わざと…？）

カナルはそう悟り、口を閉ざす。

「妾は、絶対神トリメンデス。絶対なる強大な力を持つ女神よ…怖いものなどない。」

「本当にそうかなっ？あたしには、ナレミと同じく怖がりさんに見えるんだけどっ。」

イリアもナレミに続いて、ニヤニヤ笑いながら挑発的に言った。

「だよねー。こんな怖がりわがままお婆さんが母親なんて、私って可哀想…」

「黙れ!!」

叫び声と共に、ガンツと何か碎けたような音がした。

その場の全員が、声の主であるトレメンデスに注目する。

彼女の神は激しく逆立ち、目は充血してしまっていた。

足元には、粉々に碎け散った水晶があった。

「そこまで言うのなら…妾の力を見せてやろう。」

トレメンデスは、玉座のような場所に置いてあった杖を手にとる。

そしてそれを高く掲げた。

「うねる赤き竜よ…妾の元に集まれ！」

彼女がそう声高に言うと、

「うわっ！？何だよ、これ！」

「くっ…！？地震…か？」

「うおっ！？震度…五ぐらいだな。」

神堂全体がキシキシと音を立てて、横に揺れた。

「何か：嫌な予感がしますね。」

ラトラが呟いたその瞬間。

ドドドツと滝が流れるような音がして、神堂の周りが赤く染まった。

「なんだ：異様に：」

「熱っ！！なにになにつ、どういふことっ！？」

セズリカの言葉を、イリアが引き継いだ。

床に体を伏せた一行を見下ろし、トリメンデスはくくつと楽しげに笑った。

「どうじゃ、これが妾の力だ！！地獄のマグマをここまで呼び寄せたのよお！！」

窓からじわじわとマグマが侵入し、神堂内の温度を更に上げていく。

「す、すごいのはわかりましたから…もう止めて…。」

「ダメじゃ。妾をバカにした罪…その身で償うがよ…い!?!?」

トリメンデスの言葉をパンツという破裂音がかき消す。

その瞬間、神堂内が青い冷気に包まれ、周りを覆っていたマグマを凍らせた。

「今度は…寒いっ!!」

「誰がこんなことを…?」

自分の体を包むように両腕を組むイリアと、怪訝顔のセズリカ。

「…私だけど?」

二人に言葉を返したのは、ナレミだった。

左手には硝煙を上げる銃が携えられている。

「三色銃…青の弾。冷気を放てる弾を撃ってみたのー。熱いの、嫌いだし。」

「ナレミい…また妾の邪魔をしておってからに!!」

「うるさいなあ…わがままおばさん。力があるとか無いとか、どうでもいいのー。さっさと、懺魔の居場所、教えてよー。…じゃないと、次は、あんたを撃つよ?」

歯をギリギリと噛み締めるトリメンデスの額に、ナレミは銃口を向けた。

これには、トリメンデスも、やや怯み気味だった。

「凄まじい親子ゲンカもあつたもんだぜ…。」

「…見ていて弱冠の虚しさを感じるな。」

シークとアルフは顔を見合わせて、小声で感想を言い合った。

「…覇の砦で眠ってははずだ。」

「覇の砦…。ここからだ、南西の方角ですね。距離は…三十キロメートル。」

ラトラが補足するように言った。

「場所がわかったのならば、急がなくては…。」

「よっし！全速力で覇の砦に向かうぜ！」

アルフとリアゼが言って、

「おう、行くぜ。」

「しゅっぱーつだねっ！」

シークとイリアがそれに応じるかのように返答し、他の者達も頷いた。

「じゃ、またね、わがままおばさん。」

ナレミは銃を素早く服のポケットにしまうと、我先に…と南西へ飛び立つ。

「世話になったよ。それじゃ、自分達は急ぎます。」

エマを含めた全員はトリメンデスに一礼し、神堂を後にした。

一人、神堂内に残されたトリメンデスは、

「…もう遅い。だが、あやつらがどう抗うか…見てみたくなっとな。」

ぽつりと呟くと、杖を振り上げ、氷を溶かしマグマを元の位置へと戻す作業にとりかかったのだった…。

「…目を覚ましたまえ、我らが主よ。」

覇の砦。

ぼっこりと空いた穴の前で、ファイルは黒い水晶を手呟いていた。

後ろには、ミトウとシス、左隣にはファイドが佇んでいる。

「……………我を呼び起こすのは誰だ？」

すぐに、穴の中から声が返ってきた。

「主様ー！お迎えに参りましたー！」

「シスとミトウ、ファイル様も居ますよー。」

シスとミトウが、穴の前に手をついて大声で返す。

途端に、穴から滝のような大量の紫色の水がドバツと吹き出した。

そしてその水の中から、

「ミトウ…シス…ファイル。忠実なる我が僕達^{しもべ}か。」

一人の男性が現れた。

鬼のように歪んだ形相、鋭く尖った歯、ふさふさの髭、さすまた…
閻魔にそっくりな人物。

「お前が懺魔…か？」

「そうだ…我は懺魔。強大なる力を持つ魔人だ。」

ファイドの質問に、魔人：懺魔は地を震わすような不気味な大声で答える。

「主様：紹介いたします。彼がファイド・クリック：あなたを目覚めさせた主要人物です。」

フィルが前に歩み出て、ファイドに右手を向ける。

懺魔の大きな瞳が、ギロツとファイドを睨んだ。

「我に…何を望む？」

「世界を崩壊させるほどの潜在能力。それを今、使うこと。」

ファイドは短く答えた。

彼の顔には、口元が引きつった妙な笑みが浮かんでいた。

ミトウとシスはその言葉を聞いて、わあとかイエイとかいった、感

嘆の声を上げている。

「…良からう。我が願いも、まさしくそれに同じ。そなたが協力を惜しまぬならば、願いは自然叶うであろう。」

懺魔はそう言うと、さすまたを地にガツツと深く突き刺したのだった…。

「きゃっ!?!」

「あ、危ない!」

青年は、よろめいた女性を抱え込むようにして支えた。

「あ…ありがとう、リー君。」

リーと呼ばれた青年は、どういたしましてと言葉を返し、女性を床にゆっくりと座らせた。

「…収まったみたいだ。ケガは無いですか、メルディおばさん。」

「ええ…大丈夫よ。もう、揺れも収まったようね…。」

メルディと呼ばれた女性は、イスに片手をつき、起き上がる。

「ひどい揺れだったわね…地震かしら？」

「あんな揺れでも寝てられるなんて…カナルってある意味、大物だぜ。」

リーは呆れ果てたような表情で、二階へと続く階段を見つめたのだった。

少女は愛犬をギュッと抱きしめ、地面に座り込んでいた。

「アル、見て…空が紫色だよ…。なんだか寒くなってきたし…地震も起きたし…。怖いよ…アル…。」

「クウン…。」

アルと呼ばれたラブラドルは、目を細め小さく鼻を鳴らした。

「死神は…あの空に居るのかな…？アルフ…大丈夫かな…？」

少女は目にうつすら涙を浮かべ眩くと、自分と同じように体を震わせるアルの頭を撫でたのだった…。

ケルジャヌ区五番街。

「これは…!？」

少年は、タロットカードをめくり絶句した。

カードに描かれていたのは、雷に打たれる白い塔。

崩壊を示すTOWERのカード。

「じゃあ、未来は…？」

少年は独り言のように呟くと、また違うカードをめくる。

「運命…？」

歯車が描かれたカードを見て、少年は紫色に染まった空を窓越しに見つめた…。

「始まっちゃった…。もう…誰にも止められない…。」

メントノフは、うつむいたまま小さく言った。

彼女が居る建物は、壁や天井がパラパラと音を立てて崩れていつて
いる。

その破片は、メントノフの足の近くに落ちて、カンツと音を立てて
いた。

「ごめん…アルちゃん。僕は…止められなかった。僕自身の運命も
…君の運命も…変えることができなかったんだ…。だから……………さ
よなら。」

メントノフは手元に落ちてきた天井の欠片を拾うと、自身の胸にそれを突きつけ、

「さよなら…僕の大事な人。せめて…消滅で償うよ。……っああ！」

深々と突き刺した。

鮮血がパツと床に飛び散り、彼女の腕から欠片がスローモーションのようにゆっくり落ちていった…。

アルフは妙な胸騒ぎを覚え、不意に飛び止めた。

「ど、どうしたの…兄さん？」

彼の前を飛んでいたカナルが、驚いてアルフの元に飛び寄る。

「…………師匠の気配が消えた。」

「えっ…?」

「…いや、何でもない。先を急ごう。」

アルフは何事も無かったかのように言うと、再びバサバサと飛び始める。

「兄さん…?」

カナルは不思議そうな表情でアルフの後ろ姿を見つめた。

（泣いてた…。お師匠さんに何かあったのかな…。）

「カナルー。早く行くよー。」

前方から、ナレミの呼び声が聞こえてきた。

「ぐぬおおお!?!」

絹を切り裂くような鋭い悲鳴が響く。

「主様!?!」

「どーしたんですか!?!」

胸部を抑えしやがみ込んだ懺魔の体を、ミトウとシスが両脇から支える。

懺魔の胸部には、十字架のようにクロスされた傷ができていた。

「これは…呪いだね。相手を確実に消せるけれど、自分も命を失う…自他滅呪。」

「堕ちた者が使うという…呪いか。さっきの鼠がかけたんだろう。」

フィルとファイドは、懺魔の傷を見つめながら冷静に考察した。

「フィル様も、ファイド様も！主様が大変な時に、何を呑気なことを…」

「ぐっ…まさか、貴様らは…うつ…我を利用して…見捨てるつもりか…！？」

苦痛の表情を浮かべる懺魔の問いかけに、ファイドが見下すような視線を返す。

「目的は同じ…けれど、支配者は二人も要らない。」

「ファイド様…私達も見捨てるつもりですかー？」

「どうするかな…。僕の側に付くなら、崩壊する世界を見せてあげよう。」

ファイドの誘いに、それも悪くないなーとミトウは考えた。

「崩壊は決して止められない。やがては、天界だけでなく、下界をも飲み込むだろう。そう…全ては終わる。ここで終わるか…崩壊を高みの見物とするか…。どうする、ミトウ、シス。」

「お前達まで…わ、我を…裏切る…か…」

懺魔の声が消えて行く。

同時に、彼の体も塵と化し…見えなくなった。

シスはその様子を見届けると、

「…わかりましたよ、ファイド様。今日からあなたが、あたしとミトゥの主です。」

意を決したように答えた。

「フィルはもちろん…ミトゥは異存はないよな？」

「ふふ…滅相もない。」

「面白ければー、私はオツケーです。」

フィルとミトゥは、ごく当然のことのようにそう返した。

「ならば早速、あそこに見える鼠達を退治してもらおうか。」

ファイドが指差した“鼠”とは、アルフ達一行のことだった。

「間に…合ったのかな？」

「むしろ…手遅れなんじゃない？　なんか、仲間割れしてるみたいだし。」

カナルの自問自答に、ナレミがどうしても良さに返した。

「カナル…アルフ…。倒し甲斐がある敵が二人もー！」

「新しい主様の命令…それに復讐のためにも。世界崩壊の前に、あんた達二人は消してやる。」

楽しげに手をパンツと打ち鳴らすミトウと、二人を睨みつけるシス。

「世界崩壊…。もはや、止められないんですね。」

「ならば、私達のやるべきことは一つだな…。」

ラトラは三叉槍を、アルフは大鎌を胸の前に構える。

「天界の崩壊は止められねえが…」

「下界の崩壊は食い止められる。」

「イーリアちゃん達の手で、何とかしてみせるんだからっ！」

続いて、シーク、エマ、イーリアの三人も大鎌を持ち身構える。

「ふふ…。さあ…始めようか。」

誰よりも先に、フィルが動く。

右手に携えた大鎌を大きく振り上げ、

「影よ…困惑させたまえ。アバターソング！」

呪文のようにそう呟く。

すると、

「うわっ!？」

「なっ…!?!?これは…!」

「きゃっ!?!」

各々の背後に、フィル・ティディオの幻影が出現した。

「どれが本物か…当ててごらんよ。」

「くっ…!」

ガチッ!!

フィルの幻影の攻撃を、アルフはすぐさま振り返り大鎌で受け止める。

「カナル…たまには、兄弟らしく遊んでみようか。」

「うわわっ！フィル兄…！？」

ヒュッ…。

カナルは、フィルの幻影の薙ぎ払いを、大鎌を軸にしてひょいと飛んで避ける。

「うおっ！？」

「やっ！？」

カカン！

シークとエマはフィルの幻影の攻撃を受け流し、お互い背中合わせに立つ。

ナレミやラトラ、セズリカにリアゼ、イリア達も幻影の攻撃を避け、互角の戦いに持ち込んでいる。

「フィル様、すっごーい！私も…えーいっと！」

フィルを賞賛しながら、ミトウは鉾を横に振る。

空間に切れ目が出現し、そこから大量の蛇や蛾が現れた。

「行っちゃってー、私のかawaii毒蛾ちゃんに毒蛇ちゃん！」

ミトウの言葉に反応するかのように、蛇や蛾は散らばってアルフ達を襲う。

「んー…虫、嫌いなんだよねー。」

ミトウの攻撃に、ナレミが銃口をそちらに向けた。

「…赤の弾、火炎弾。」

銃の引き金がグツと引かれ、バンバンと数発の赤色の銃弾が発射される。

ボツ…！バアアア…！

銃弾は、毒蛾と毒蛇の群に当たると破裂し、凄まじい炎で燃え上がらせ灰と化させてしまった。

「青の弾、凍物弾。」

ナレミは銃の上のダイヤルを回し、他の方向にもバンバンと銃を撃つ。

青色の銃弾からは、つららが出現し、触れた蛾や蛇をカチンと凍らせていく。

「まだまだー。殺人カラスちゃん、ゴー…！！」

ミトウは全く怯まずに鉾を振る。

振られた鉾からは、無数のカラスが出現し、ミトウを集中的に襲った。

「めんどくさいなー。これで終わりにするからねー。…黄色の弾、豪雷弾！」

再びダイヤルをカチッと回し、銃弾を放つ。

三つ目の銃弾からは、稲妻が発生し、

「カー…!!？」

「グカー!!！」

バリバリとカラス達を痺れさせ、焼き焦がす。

「はあ…はあ…何とか倒せた…。」

「ふう…幻影でこんなに強いなんてっ…!。」

その頃には、全員がフィルの幻影を倒し終えていた。

「おまえさん達の術は、もう二つ破っちまったぜ。どうするよ?」

「一つは、ナレミが破ったのに…偉そうだね、シーク。」

「うっ…そこは言うなよ。決まらねえだろうが…。」

エマに突っ込まれ、嘆くシーク。

その間にも天界の崩壊は信じられない速度で進み、足場となる雲もボコボコと穴が空いていた。

「ちっ…次は、あたしの攻撃を受けてみな!ダイヤル0、雷撃!」

シスは早口に言うと、鉾に付いているダイヤルをカチリと回す。

「げっ…まずい、逃げろ！」

「何がまずいんですか…んっ!？」

リアゼの忠言に問いかけようとしたラトラは、反射的に後ろに飛び退いた。

直前まで彼の居た場所に、ガンという音を立てて稲妻が走っていた。

「この程度…飛び立てば何のことも無い…っう!？」

翼を広げようとしたセズリカのすぐ真後ろに、雷が落ちる。

翼の先端が少し焼け焦げ、嫌な匂いを放ちだしていた。

「逃げる暇なんかやないっつの。そらっ!！」

シスは休む暇なく、鉾を振り回す。

「んーっ…!?!」

「わっ!?!」

「うわあっ!?!」

ガンガンガンと、あちこち不規則に落ちる雷に、アルフ達は反撃する暇が無い様子だった。

「あっはは!もっと、もっと惑っちゃえ!」

「…そこまでだよっ、シス。」

「えっ…!?!」

低く脅すような声を背後に感じ、シスは慌てて振り返ろうとした。

しかし、

「…っな!？」

チャキ…と、彼女の首を囲むようにして交差した二本の大鎌のせいで身動きがとれなかった。

「後ろが、がっらあきだったねっ！」

勝ち誇った笑みを浮かべてそう言ったのは、イリアだった。

「シスー! 待っててー、私が助けに…あっ!？」

シスに向かって飛ぼうとしたミトウも、同様に動きがとれなくなった。

「動くな…消されたくなくばな。」

こちらは、台風のような風を纏った、アルフの大鎌の刃が額の前に

あった。

わずかに刃が当たった部分から、一筋の血がツーツと流れていることが、ミトウにも理解できた。

「追い詰められた鼠は、猫をも噛む…か。ふっ…面白い。」

仲間の二人がピンチというのに、ファイドは腕組みをして高みの見物を決め込んでいた。

「ふふ…形成逆転されちゃったようだね。」

フィルも手を出さず、いつもの微笑みを浮かべただけだ。

「な…何がおかしいのっ!？」

「イリア…何か二人とも様子が変だよ。」

エマが警戒するように言ったその直後。

バーンと、大砲が爆発したような豪音が穴の中から響いた。

「うおっ!?! な…何だ、今は…?」

「皆さん…あれを見て下さい!」

シークの疑問に答えるように、ラトラが指差して叫ぶ。

その方向には…

「くっ…ははは!! 馬鹿な奴らだな、おまえら! どうあがいても、遅えんだよ!!」

「ハッシェ…!?!」

「それに…何だよ、あのめちゃくちゃ大きい大砲!!」

裏切りの神ハッシェとの姿と、全長約十メートル、太さ二メートルほどの巨大な大砲があった。

「今までの戦いは、あれの時間稼ぎだったというわけですか…。」

「なるほど…私達は踊らされていたんだな。」

ラトラとセズリカは諦め切ってしまったのか、意外にも落ち着き払っていた。

「遂にやったか…ハッシェ。」

「へっ、俺だってやればできたよ、ファイド・クリック。」

ハッシェはファイドに言葉を返すと、大砲の先をグッと下界へ向けた。

「止めろよ…!!」

「おっとお…動くんじゃないぞ？俺を動揺させたら、すぐにでもド

カン…だぜ！」

「うつ…。」

ハッシエに向けて駆け出そうとしたリアゼも、こう言われては動けない。

「この…卑怯者っ！正々堂々と、イーリアちゃん達と勝負しなさいっ！」

「俺達に勝てる自信が無えってやつか？」

イリアとシークが挑発するが、ハッシエはそれには乗らなかった。

「負け犬が何をほざいても、虚しいだせだぜ？おまえらとのおしゃべりには、もう飽き飽きした。一発ドカンとやって終わりにしてやんよ！！」

ハッシエは早口にそう言うと、懷からマッチを取り出し導火線に火を付ける。

火は導火線を凄まじい勢いで燃やし始める。

「今だ…！やあっ…！」

「うん、えーいつ。」

「……っ！？」

「きゃっ！？」

シスとミトウは、ハッシェに氣を取られていた二人を振り払い、サッと大砲の元へ飛ぶ。

「くっ…逃げたか…！」

「へんっ！だーれが、捕まっただまま終わるかつーの…！」

「面白そうだから、私達も参加っ！。」

シスとミトウも、懷からマッチを取り出し、更に導火線に火を付け足す。

ゴウゴウと音を立て、導火線は燃えていく。

あと十秒ほどで、燃え尽きてしまうだろう。

（ど、どうしよう…。もう…。本当に止められないよ…。）

「カナル！…鎌を持て。」

「えっ…兄さん…わっ！？」

アルフは弱気なカナルの左腕を掴むと、そのまま大砲へ向かって飛んでいく。

「アルフ…！？…どうするの…」

「大砲を…壊す。」

「正気か…！？君達まで、爆発に巻き込まれるぞ！」

「……………わかっている。」

面食らうイリアとセズリカに言葉を返すと、アルフはぐんぐんと飛ぶスピードを上げていく。

「兄さん…僕はどうしたらいいの…？」

「大鎌で大砲の中心を斬れ。断の力を解放すれば、真っ二つに斬れるはずだ。」

「兄さんは…？」

「私は神力を最高値まで上昇させ、豪風を大砲に当てる。…怖いのか？」

「うん…ちょっと怖いけど、兄さんと一緒なら…やれるよ！」

自分達を諫める声が後ろから聞こえる中、アルフとカナルはわずか

に微笑んで顔を見合わせた。

「行くぞ、カナル。」

「うん、任せて、兄さん！」

「させてやんねえよ…そんなことは！」

大鎌を構える二人の前に、ハッシェが立ちはだかる。

だが、

「赤の弾、火炎弾！」

ナレミの銃から発射された炎。

「狂気鳥終歌！」

エマの舞いで出現した無数のハト。

「小鎌連突!!」

リアゼの多量の小鎌攻撃。

「今の内だよ、二人とも!」

それらがハッシエの進行を妨害した。

「ちっ…くだんねえ真似しやがって…!」

「まだまだあたしとミトウがいるってーの!! ダイヤル三、闇の宴
!」

「簡単には行かせないよー。殺人カラスちゃん、レッツゴー!」

次には、シスの闇霧とミトウのカラスが立ちはだかる。

「もう！時間が無いのに…！」

「…っ…前が見えない…。」

暗闇でカラスの攻撃で、アルフとカナルは一時飛行を遮断されてしまった。

しかし、それには

「斬裂波…！」

セズリカの大鎌から放たれた、いくつもの衝撃波。

「後斬り…神速！」

シークの素早い斬り攻撃。

その二つが対抗する。

「行け!!」

「あ…ありがとう、セズリカさん。」

「…すまない。」

霧がわずかに晴れ、カラス達もたじろいでいる間に、アルフとカナ
ルは飛行を再開する。

大砲はもう、手を伸ばせば届く位置にあった。

「よし!今こそ解放せよ…断の…うわっ!？」

「カナル!!」

大鎌の力を解放しようとしたカナルの前に、最後の要であるファイル
が立ちはだかる。

「フィ…フィル兄…。」

「やあ、カナル。あれからどのくらい強くなったのか…お手並み拝見といこうか。」

フィルの顔が真剣な顔つきに変わる。

「大鎌よ、絶望を歌え…エンディングリズム!!」

彼が大鎌を振ると、背後から青色の龍が現れた。

「カナル…!」

「待て。アルフレッド・フィアラ…君の相手は僕だよ。」

「……………っ!？」

自分に向かって振り上げられた鎌で、アルフは大鎌の刃で受け止める。

ガチツと金属音が響く。

「これが斬れるかい、カナル？」

「うわああっ！！」

鋭い牙を携えた大きな口を開け、龍はカナルに噛みつきこうとした。

その時。

ドクン…。

カナルの大鎌が心臓のように鼓動した。

そうして、鎌から白い光がバシュと放たれる。

「グオン！？」

青い龍は光を受けると、砂のようにパッと砕け散ってしまった。

「んっ…!?!? これは…?!」

「なっ…この光は…!?!」

フィルとファイドは光の眩しさに、思わず腕で顔を覆う。

その瞬間、ほんの一瞬だけスキができていた。

「よくわかんないけど…チャンスなのかな。もう一度…断の力!」

カナルは言葉と同時に、大砲の中心部を大鎌で横向きに斬る。

大砲は、バカッ…と呆気なく真っ二つに分かれた。

「よくやった…カナル。神力上昇……荒れ狂う旋風!」

アルフは精神統一の後、二つに斬れた大砲に向かって大鎌を振る。

ヒュッ…と竜巻のような風が放たれ、大砲にぶつかった。

「やったか…？」

「あ、あの…兄さん…？　なんか大砲が…」

「爆発する…！？」

斬られた大砲の導火線がある側には、空気が溜まってしまっていたようだった。

見る見る内にそれは膨れ上がり、そして…

「まぢかよ…おわああっ！？」

「きゃあああっ！？」

「わあああっ!?!」

バーン!!!!!!!!

大地を揺るがすほどの破裂音が響き……全てが終わったのだった……。

これが私の……いや……死神の最後の仕事だ。

この後、どうなったのか……私にもカナルにも……誰にもわからなかった。

意識は薄れ、全てが大砲の爆発の際に生じた灰色の煙に包まれ消えた。

最後の瞬間、聞こえたのは……

「ご苦労様、諸君。」

何もかも見通しているというような、男性の声だった。

ピピピピッ…ピピピピッ…ピピピピッ…。

目覚まし時計の音が響いている。

物が少ないシンプルな部屋のベッドの上。

ピピピピッ…ピピピピッ…カチッ…。

少年は目覚ましのスイッチを止めると、栗色のくせ毛だらけの髪をかきながら、ぼうつと窓の外を見つめた。

朝日がサンサンと差し込み、どこかでチチチッと鳥が鳴いていた。

「朝…？なんだろ…長い長い夢を見ていた気がする…。」

少年は半分しか開いてない黒い瞳で、時計に視線を移す。

「七時十分………。うわっ！起きなきゃ！！」

遅刻するーと叫びながら、少年はドタドタと慌ただしく階段を駆け下りた。

「おはよう、カナル。早くしないと、遅れちゃうわよ。」

「お、おはよう、母さん。遅刻すると、リーに怒られるんだよなあ…。」

母親に言葉を返しながら、カナルというらしい少年は朝食のフレンチトーストを食べ始める。

「おっはよー、カナル！そーんな寝ぼけ顔じゃなくて、朝は元気にいこう！」

「おはよう…イリア姉。そう言われても、眠いんだから仕方ないんだよ…。」

イリアと呼ばれた十代後半に見える女性は、そんなじゃダメダメっと叱咤した。

「ほーらっ！イリアを見習って、もっと声出して…」

「おまえはうるさすぎるんだよ…ピンク娘。第一、カナルは食事中だろうが。」

「おはよう…リアゼ兄。」

イリアの言葉を遮り、かつカナルに早ようと挨拶を返したのは、イリアと同じ年頃に見えるリアゼというらしい青年。

「なーによ、リアゼ！うるさいは無いでしょーが！あたしはカナルのことを考えて、言ってるのっ。」

「それがうるせえんだっつもの！少しは他人の迷惑を考えやがれ！」

「その言葉、そっくりそのまま返してあげるっ！！」

「…うるさいぞ、リアゼ、イリア。朝食は静かに食べなさい。」

二人の言い合いを凜とした声で諫めたのは、父親らしき男性。

決して大声ではないけれど、抑揚の無いその声は二人にとっては恐ろしいものようだ。

「うっ…ごめんなさい…。イ、イリア、学校行ってきました！」

「そ、そろそろ俺も、学校行こうかな…。」

イリアもリアゼもピタリと言い合いを止め、そそくさと家を出て行ってしまった。

父親は、チラとそちらに目をやると、すぐに朝食に意識を戻した。

「相変わらずだな、あの二人は。」

「そうね…ユイさん。元気がいいことは、嬉しいことなんだけど…。」

「ご馳走様。…わっ、もう本当に遅刻しちゃう！行ってきました。」

「あら…行ってらっしゃい、カナル。」

父親と母親のため息混じりの会話を聞きながら、カナルも急いで家を出た。

（全く…イリア姉とリアゼ兄は、いっつもああなんだから。なんで

かな…。」

通学路をタタツと駆けながら、カナルはぼんやりそんなことを考えた。

（元々、仲悪かったから仕方ないか…って、あれ？なんだろう…今、変な違和感が…？）

「とうっ！！」

「わっ！？」

突然、押されたような衝撃を背中に受け、カナルは危うく転びそうになってしまった。

「いったた…ひどいよ、リー…。」

「ひどいのはどっちだ、カナル。俺が散々呼んだのに、無視しやがって。親友やめるぞー！」

背中をさすりながら振り返ったカナルにやや怒りながら言ったのは、

リー・ソルボンという少年。

水色の髪は風に揺れぎ、藍色の瞳はカナルの姿をしっかりと捉えている。

「あっ…ご、ごめん。ちよつと考えごととして…」

「…って、急がねえと遅刻じゃねえかよ！話しは後だ、急ぐぞカナル！」

「わっ…置いてかないでよ、リー！！」

嫌なこったとあっかんべーするリーを、カナルはひどいよーと叫びながら追いかけていった。

「今日から、教育実習で二週間、この三年五組を担当するエマ・プルリエです。よろしく。」

エマというらしい若い女性は、生徒達ににこりと微笑みかけた。

白く長い髪が、重力でサラッと下に流れた。

「…というわけだ。それじゃ、俺はちよつくら校長室に行ってくるわ。」

「えっ、シーク先生!？」

シークと呼ばれた男性教師は、啞然とする生徒達とエマを置いて、さっさと教室を出て行ってしまった。

あとはよろしく頼むぜとばかりに、エマに赤い瞳でウィンクして、だ。

「なんて勝手な先生なんだ…あの人は。あっ…えっと、それでは出席をとります。」

エマは、やや呆気にとられながらも出席をとり始める。

「アシラバ・ヒュン君。」

「はい。」

「イスズ・ライさん。」

「なあ、カナル…エマ先生って、なかなか美人だよな。」

エマの顔をじっと見つめながら、リーが隣の席のカナルに話しかけた。

「あ…う、うん。きれいな人だね…。だけど…何か見覚えがあるんだよねあ…。」

「んっ？もしかして、知り合いかよ？」

「…ううん、やっぱり知らない人だね。僕の気のせいかな…？」

カナルは、一人納得したように呟くと、自分の名前を聞き逃さないようにエマの声に耳を傾けたのだった…。

放課後。

（こういうの…デジャブっていうんだよね…。何か変なんだよね…。
）

鞆に教科書をしまいながら、カナルはまた考えごとをしていた。

全く知らない人間に見覚えがあり、知っている人間に違和感を感じる…。

カナルは、一日の内に何度もそんな奇妙な感じを覚えていた。

（二組に転校してきた二人、ミトウとシスっていう名前もどこかで

聞いたし…、もう一人の教育実習生のフィル先生も、なんだか懐かしい響きなんだよな…。」

「カナルー、部活は今日出ないのー？」

不意に誰かが、カナルを呼んだ。

「ナ、ナレミさん…。」

名前を呼ばれたのは、ナレミ・ビバルディという少女。

カナルよりも一つ年上だが、一年間病氣療養していたため、学年は同じだった。

茶色いウェーブ髪と黄緑色の瞳が、カナルにはとても魅力的に思えていた。

「別に“さん”付けしなくていいのに。」

「ご、ごめんなさい…。今日は部活は休みます。ちょっと…急いで帰るから…。」

「敬語も使わなくていいのに。今日はOBで、セズリカ元部長とラトラ元副部長も来てるんだけど…本当に来ないのー？」

「セズリカ…？ラトラ…？」

カナルは二人の名前を繰り返して呟くと、それにもデジャブを感じた。

「んー？来るの、来ないのー？」

「…やっぱり、気のせいじゃないのかな？」

「カナルー？」

「あ…休みます。ごめん…ナレミさん！」

カナルは両手の平を合わせて謝ると、猛スピードで教室から出て行った。

「…変なカナル。」

ナレミは間延びした口調で言うと、ふんふふーんと鼻歌を歌いながら廊下を歩いて行った。

「何かがおかしい…。まるで、僕の住んでいるこの世界が変わってしまったみたいだよ…。それとも……………疲れてるから、変な感じがするのかな?。」

うつむいて、そんなことをぶつぶつ呟きながら、帰宅するカナル。

彼の傍を通っていった自転車に乗った青年が、不思議そうな表情で振り返っていた。

と、その時。

「すまない。少し道を訊きたいのだが…」

「んっ…?」

誰かがカナルに話しかけてきた。

カナルは、いいですよと快く承知し、顔を上げる。

「あっ…、あなたは…。」

話しかけてきた人物の顔を見たカナルは、思わず目をパチパチさせてしまった。

緑に近い青色の髪、冷めきったオレンジ色の瞳を持った男性。

カナルより二〜三歳ほど年上に見えた。

「私が…何か？」

男性は、穴が開きそうなほどじっと自分を見つめるカナルに、怪訝

顔だった。

「あ、あの…僕はカナル・ティディオです！あなたの名前は…？」

「私は、アルフレッド・フィアラ。…旅人だ。」

アルフというらしい男性は、そう自己紹介するとわずかに微笑んだのだった…………。

運命は…巡る。

記憶で忘れてしまっても、心は覚えている。

そして、それはいつか…

思いもよらない奇跡を起こす。

—The end—

宴の終焉（後書き）

…終わったあ。疲れたあ。

その二言につきます、はい。

軽い気持ちで作った小説が、第三部まである長編になるとは…予想もできませんでした。

この死神のお仕事シリーズを書き始めて、かれこれ…二年ぐらいかな。

飽きっぽい自分がよく続いたなあと思います。

終わらすのもつたいない気もしたけど、無性に違う小説書きたくなったから、強制終了みたいに無理やり終わりました。

まあ、続き書けるような終わり方したんですが。これは、志津那が小説書く上で気をつけることの一つです×

次回からは、またちょっと方向性を変えた小説書くつもりです。あ
ゝその前に天界人のお仕事書かなきゃなゝゝ（´ー、）

まあ、そんなこんなであとがきでした！

次回は、第三幕で新たに登場したキャラの人物プロフィールですよ
（・ω・）／

新登場人物プロフィール＋α（前書き）

αは、悪魔のお仕事のことです。ミアナは♂です。

新登場人物プロフィール＋α

◇ファイド・クリック（23歳♂）

鼻まで覆い隠すほどの長さの茶色い髪を持つ死神。瞳は黒。

昔は、人の命を救う死神だったが、アルフを救って消滅して以来、彼の中で何かが変わった。

翼は青。ルティーナを愛すあまり、消したいという欲にもかられてしまった。

◇ナレミ・ビバルディ（20歳♀）

茶色いウェーブ髪と黄緑色の瞳を持つ天使。

お気楽でマイペースな性格。絶対神とは母娘だが不仲。トリメンデス

セズリカとは因縁がある。

◇ラトラ・アイヌダ

（16歳♂）

白いサラサラ髪と赤い瞳を持つ悪魔。

真面目で礼儀正しい性格。アイヌダの家系に誇りを持っている。
ハッシェとは不仲。

◇セズリカ・ミルハ

（18歳♀）

緑に近い青髪と桃色の瞳を持つ。アルフのオリジナルに当たる死神。冷静でミステリアスな性格。自分と境遇が似ているリアゼを同志と
思っている。

アルフにそっくりだが、二人称は“君”を用いることが多い。

◇ハッシュェ・トリミン（29歳♂）

金色の長髪と紫色の瞳を持つ神。よく裏切るため、天界においてはかなりの嫌われ者。

自己中心的で、自分の興味あることでしか動かない。
アルフをライバル視して、からかっている。

◇トリメンデス（年齢不詳♀）

腰まである亜麻色の髪と藍色の瞳を持つ絶対神。ナレミ・ビバルデ
イの母親。

人を見下していて、プライドが非常に高い。

『死神のお仕事番外編…悪魔のお仕事』

悪魔の仕事…それは、人間を魔に導くことではない。

唆し、悪事を働かせることでもない。

僕達、悪魔の仕事…それは……………。

「ラットラさん、ラットラさん！今から仕事かいな？」

天界にある中央広場。

一人の悪魔が僕に話しかけてきた。

キラメル色の髪を頭の上でおだんごにまとめた悪魔の名前は、ミ
アナ。

僕のことを異様に慕う変わり者だ。

「はい、そうですけど。君は、今日はオフなんですか？」

「うん、うちは休み！今日は、友達と襤行く約束しとるから。」

「そうですか…それじゃ、僕は急ぎますので。」

ミアナに淡々と言葉を返し、僕は黒く小さな翼をバサッ…と広げた。

そして、

「まったなし、ラットラさん！」

ミアナの大声を背中に受けながら、下界へと飛び立つのだった…。

ミアナから“ラットラさん”と呼ばれる僕の本名は、ラトラ・アイヌダ。

黒い小さな翼と、鬼のような角が頭部に二本、馬のような尻尾。

外見からわかる通り、正真正銘の悪魔。

天界に住む他の三種族と同じで、もちろん僕達も仕事をする。

一般には、“人間を魔に導く”とか“不幸を運ぶ”とか思われているらしいけれどそれは違う。

僕達悪魔の仕事は、正と負の均衡を保つことなんだ。

つまり：正に溢れすぎている場所には負を注ぎ、負に溢れている場所には正を注ぐ。

そうすることによって、空間の天秤を正しくできる。

：僕の今回の仕事場には、負が満ちていた。

「…やはり、こうなっていましたか。」

僕は仕事場を見て、事も無げに呟いた。

ラジアン区二一八十五番地。

そこに建つマンションの三階、305号室。

僕は開け放たれた窓から、当然のように部屋の中へ侵入した。

そして…見た。

「……………」

「……………」

言葉を発しない血だらけの少年と、背中から血を流し苦しげに呻く
幼女。

近くには、べっとりと血がついた刃渡り二十センチほどのサバイバルナイフ。

床に散らばる服や日用品。

予想はしていたけれど…あまりの予想通りの状況に、僕は何も言えなかった。

（今更、何も変わらない気はしますが…）

僕は、少年と幼女がいる場所のすぐ真上にある“空間の天秤”に鉾を向ける。

そして、鉾をヒュッと一振りした。

グラッ…。

鉾から放たれた魔力を受け、空間の天秤が正の方に戻り始めた。

そうしてすぐに、均衡のとれた正しい天秤になった。

「これでよし…ですね。」

誰にともなく呟いて、帰ろうとしたその時だった。

「お……兄……ちゃん……。」

小さな小さな呼び声が聞こえた。

「んっ……？」

振り返ると、最後の力を振り絞って僕に向けて細い手を伸ばす少女が見えた。

「お……兄ちゃん……。怖……。い……。よ……。。」

黄色い髪を持つ幼女の瞳には溢れんばかりの涙が浮かんでいた。

しかし、その瞳はもうぼやけてしまっているのだろう。

すぐ隣に居る本当の兄がわからず、僕を兄と誤ってしまっているのだから。

「……………」

別に義理も何もなかった。

けれど、僕は幼女に近づき思わずその手を握ってしまった。

すると、彼女はあったかいよ…とわずかに微笑んだ。

「お兄ちゃん……………手……………あったかい……………」

スツ…トサツ…。

幼女の手が…力なく床に落ちた。

彼女の瞳は固く閉じられ、口元は少しだけほころんでいた。

僕は、すぐに幼女の腕を持ち上げ脈をとる。

……脈は無く、手もだんだん冷たくなってきていた。

（奇跡は…起きませんでしたか。）

僕はそう悟ると、そっと床に彼女の手を下ろした。

不思議に思われるかもしれないけれど、悲しいとも哀れとも何も感じなかった。

彼女の死は僕のせいではないし、第一それは死神の仕事だ。

僕は、均衡をとるだけ。それ以上のことをする意味も必要もない。何かしたところで、給料が上がるわけでも誉められるわけでもない。

だけど僕は……なぜだかそうしたんだ。

「ラトラ・アイヌダ：何度も言うけど、お前ってちよつと変わり者だよな。」

仕事を終え、天界に戻った僕は同僚の悪魔にそう言われた。

「僕の行動に、何か変なところがありましたか？」

「変も何も…、たまたま現場に派遣されたからって、あの子供達のために墓つくって埋めてやるなんてしねえだろうよ。おまけに、墓の前で手を合わせてるときたもんだ。そんな悪魔：天界中探しても、お前ぐらいしかい居ないだろうよ。…なんで、そんなことするんだ？」

「…………別に、気が向いただけですよ。」

僕はそう言葉を返すと、すぐさまいつもの場所に帰ったのだった…。

いつもの場所とは、地獄の東南東にある宿のことだ。

そこは、悪魔の憩いの場…というにはおかしいかもしれないけれど、悪魔がよく集まる場所だ。

「あっ！ラットラさん、仕事終わったんやね、お疲れ様！」

何人かの悪魔が雑談している中、ミアナは僕を見つけるとすぐに走ってきた。

「今度の仕事…どやった？ラットラさんの派遣される場所、いつも負に満ちとる場所やん。うち…ラットラさんが悲しい思いしてへんか、心配で心配で…。」

「大丈夫ですよ、ミアナ。もう慣れましたし…悲しいという感情はもとい、仕事には全く私情を交えてませんから。」

「ほああ…さっすがはラットラさんやな！うちやったら、負の多い場所では泣いてまうのに。」

ミアナはそう言うのと、ポンッと手を打ち鳴らした。

「そうや、ラットラさん。手紙受け取ってたで。」

「手紙…？」

「はい、これや。」

僕はしわくちやになった封筒を受け取った。

差出人の名前は…書いていない。

表には、ラトラ様へとかろうじて読めるぐらいの字で書かれていた。

「名前が無い手紙…珍しくもあらへんけどな、天界では。」

「ええ…それはそうですが。手紙なんて…何年ぶりかですね。」

封筒の封を破り中身を取り出す。

白い便箋には、丸っこい文字でこう書かれていた。

『ラトラ・アイヌダさまへ。ぼくはナキといいます。いもうとは、メトです。おはか、つくってくれて、ありがとう。いもうとも、ありがとういってました。ぼくとメトは、えんまさまにたのんで、ふたりとも、あくまになります。』

「…なんや、かなばっかりで読みにくい手紙やな。」

後ろから僕宛ての手紙を、こっそり覗き込んでいたミアナが言う。

「子供ですからね。無理もないでしょう。」

「ふうん…。ラットラさん、手紙もらえて嬉しい?」

「いえ…嬉しくはないです。僕は、僕のために行動したことで感謝されても、むしろ困ってしまいます。まあ、でも…」

「でも…?」

「今回だけは、ありがたくもらっておこうと思います。」

そう言って、ひらがなばかりの読みにくい手紙を、僕は内ポケットにしまい込んだ…………。

—END—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3863g/>

死神のお仕事-第三幕-

2010年10月9日03時52分発行